高知空港周辺整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

第　3　集

―― 南国市田村・前浜地区の調査 ――

1987. 3

高知県南国市教育委員会

序

高知空港の拡張整備事業が昭和54年度から実施された事により，それに伴う広い範囲の「田村遺跡群」の発掘調査が，高知県教育委員会により行なわれ，弥生時代の農耕集落址や中世の田村城館周辺の屋敷群など貴重な遺構が確認される等，考古学上大きな収穫がありました。

併せて，南国市は昭和56年度から空港周辺整備事業を計画的に実施し，市道・農道・水路等の改修整備について，昭和60年度迄に完了いたしました。

当該工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は各年度共に実施し，56年～58年度調査区については，これまで「西見当遺跡発掘調査報告書―田村西見当農道改良工事に伴う発掘調査」「高知空港周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―田村・前浜・大埇地区の調査」にまとめてきました。

本報告書は，昭和59，60年度に調査した，前浜字三ノ戸，田村字徳升・正善，西見当，末通し地区での発掘調査の成果のまとめであります。本書が，広く一般に活用され，文化財保護の一助となれば幸いです。

終りに，この発掘調査にあたって，特にご繁忙の中を懇切なご指導，ご尽力をいただきました高松短期大学・岡本健児教授，高知県教育委員会文化振興課・山本哲也主事，出原恵三主事，並びに高知県教育委員会文化振興課南国調査連絡所の皆様，この発掘調査にご協力下さいました関係者の方々に心からお礼申し上げます。

昭和62年３月31日

南国市教育委員会

教育長　鈴　江　廣　幸

例　　言

1．本書は，南国市教育委員会が昭和59年度及び昭和60年度に実施した，高知空港周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査は，南国市教育委員会が主体となり，高知県教育委員会の指導を得て実施した。昭和59年度の調査は，南国市前浜字三ノ戸及び田村字徳升，正善地区で実施し，高知県教育委員会文化振興課主事山本哲也が担当した。また，昭和60年度は，南国市田村字西見当，堂の西，末通しの調査を行い，高知県教育委員会文化振興課主事出原恵三が担当した。なお，遺物整理作業及び報告書作成は，昭和61年度に実施した。

3．発掘調査の実施にあたっては，高知県教育委員会文化振興課をはじめ，地権者及び地元関係者．南国市企画財政課空港運輸係の御協力をいただいた。関係各位に，あらためてお礼を申しあげたい。

4．本書の執筆は，Ⅰ・Ⅴ・Ⅵを出原恵三が，Ⅱ～Ⅳを山本哲也が担当した。編集は，南国市教育委員会が行った。

5．本書には，遺構及び遺物包含層が検出された南国市田村字西見当，末通し，正善，徳升地区及び地形実測作業を実施した前浜字三ノ戸地区の調査内容を収録した。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経過と調査の方法 …… 2

Ⅱ　前浜地区の調査 …… 5

Ⅲ　徳升地区の調査 …… 7

Ⅳ　正善地区の調査 …… 10

Ⅴ　西見当地区の調査 …… 17

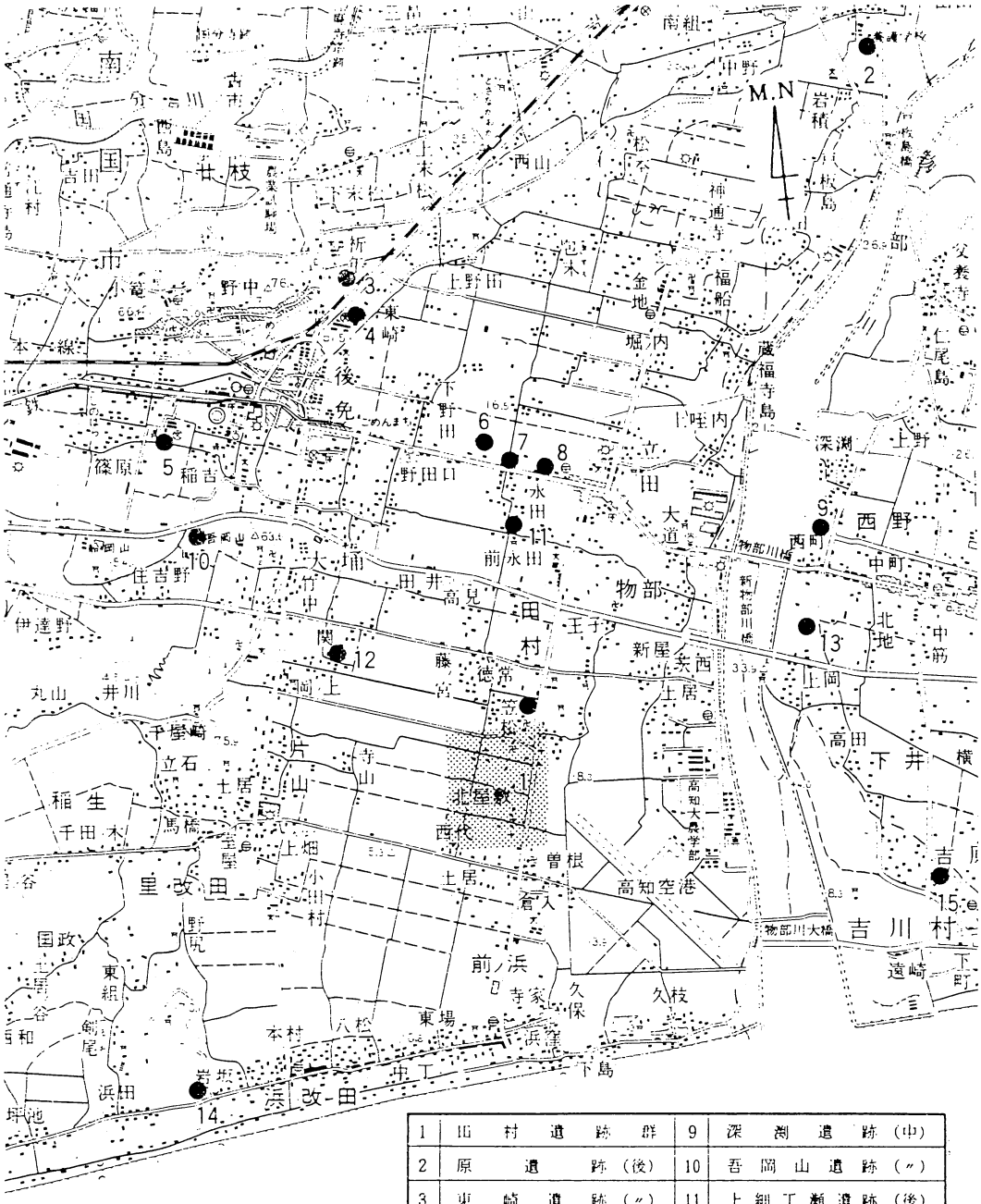
Ⅵ　未通し地区の調査 …… 21

挿　図　目　次

Fig 1　周辺の弥生時代遺跡分布図
Fig 2　発掘調査地点位置図
Fig 3　調査地点位置図
Fig 4　前浜（三ノ戸）地区　地形実測図
Fig 5　正善地区　TR６・７　平面図及び断面図
Fig 6　徳升TR１～３
Fig 7　徳升地区TR４平面図　正善地区TR１～５土層断面図
Fig 8　正善地区TR６竪穴住居址平面図　TR６・７土層断面図
Fig 9　出土遺物実測図　（徳升及び正善地区出土遺物）
Fig 10　出土遺物実測図　（正善地区　竪穴住居址出土遺物）
Fig 11　西見当地区調査区
Fig 12　西見当地区検出遺構全体図
Fig 13　西見当地区検出遺構及び出土土器・石器実測図
Fig 14　西見当地区包含層出土石器
Fig 15　末通し地区調査区
Fig 16　末通し地区検出遺構全体図
Fig 17　末通し地区ST１，SK１～８遺構図
Fig 18　末通し地区SK ９～14，SK16遺構実測図
Fig 19　末通し地区SK 15・17～23，Ｐ１・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ５・Ｐ７・SD１・SD３遺構実測図
Fig 20　末通し地区ST １出土土器実測図
Fig 21　末通し地区ST １・SK３・４・５・６出土土器実測図
Fig 22　末通し地区SK ６・７・８出土土器実測図
Fig 23　末通し地区SK ８出土土器実測図
Fig 24　末通し地区SK ８・９・10・11・12出土土器実測図
Fig 25　末通し地区SK 12・13・14・16・20出土土器実測図
Fig 26　末通し地区SK 20・21出土土器実測図
Fig 27　末通し地区SK 21・SD１出土土器実測図
Fig 28　末通し地区SD １出土土器実測図
Fig 29　末通し地区ST １・SK７出土の石器実測図

図　版　目　次

PL 1　前浜（三ノ戸）地区近景
PL 2　徳升地区TR 1 ～ 3 近景・徳升地区TR 2 東壁
PL 3　徳升地区　溝 2 検出状態
PL 4　徳升地区　TR 4
PL 5　徳升地区　TR 5 ・正善地区　トレンチ設定状況
PL 6　徳升地区　TR 1 ・ 2
PL 7　徳升地区　TR 4 ・ 5
PL 8　正善地区　TR 6 ～ 8
PL 9　正善地区竪穴住居址
PL 10　出土遺物　徳升地区TR 2 ・正善地区TR 1 ・ 2　正善地区竪穴住居址
PL 11　西見当地区調査前全景写真及び調査区
PL 12　西見当地区SK 2，P 1，包含層出土土器・包含層出土石器
PL 13　末通し地区ST 1 Ⅰ層土器出土状況・ST 1 完掘状況
PL 14　末通し地区SK 8 土器出土状況・SK 5 完掘状況
PL 15　末通し地区SK 12遺物出土状況・SK12完掘状況
PL 16　末通し地区SK 20・SD 1 遺物出土状況
PL 17　末通し地区SD 1 ・SK11セクション・SD 1 遺物出土状況
PL 18　末通し地区SD 1 ・SK11完掘状況・調査区完掘状況
PL 19　末通し地区SK 20(84)・SD 1 (91・95・114) 土器
PL 20　末通し地区SK 20(79・81)・SK 8 (55)・SK12(62)土器
PL 21　末通し地区ST 1 (3 ・16・ 5 ・ 9 ・11・12)・SK16(77)・SK 3 (20)
PL 22　末通し地区ST 1 (14・17・18・19)・SK 3 (21・22)
PL 23　末通し地区SK 7 (26)・SK 6 (29)・SK 8 (41・42・43・45)
PL 24　末通し地区SK 8 (48・49・50・51)・SK12(62・63)
PL 25　末通し地区SK 10(64)・SK12(68・69)・SK16(73・78)・SK20(80)
PL 26　末通し地区SD 1 (90・93・94・96・112)
PL 27　末通し地区SD 1 (104･105･110･108)・ST 1 (10)・SK 6 (31)・SK 7 (36)・SK14(72)
SK16(76)
PL 28　末通し地区　ST 1 出土石器



1	田村遺跡群	9	深渕遺跡（中）
2	原遺跡（後）	10	吾岡山遺跡（〃）
3	東嶺遺跡（〃）	11	上細工瀬遺跡（後）
4	農業高校々庭遺跡（〃）	12	関銅鐸出土地（中）
5	大篠遺跡（〃）	13	北地遺跡（後）
6	長中内遺跡（〃）	14	トリアサリ遺跡（中・後）
7	平杭遺跡（〃）	15	野口遺跡（後）
8	大北遺跡（〃）	16	

Fig 1　周辺の弥生時代遺跡（５万分の１）

1000 0 1000 2000 3000

Fig 1　周辺の遺跡

Ⅰ　調査に至る経過と調査の方法

高知空港は，昭和59年度12月にジェット化され近代的装備を整えた空港として再出発することとなり，周辺部においても幹線道路の整備，進入灯の新設等その景観を大きく変貌させつつある。しかしながら，空港周辺地域の大部分は水田，ハウス園芸等に利用せられている優良農地であり，当然のことながら商品作物の生産向上・運搬においても空港近代化の恩恵に浴さなければならないところである。かかる状況下において，高知空港周辺整備事業の中で農道と水路の改修工事が行われることとなった。当該工事区域は，田村遺跡群の範囲内にあり埋蔵文化財の存在が考えられる。したがって工事に先立って事前の発掘調査を実施するはこびとなった。

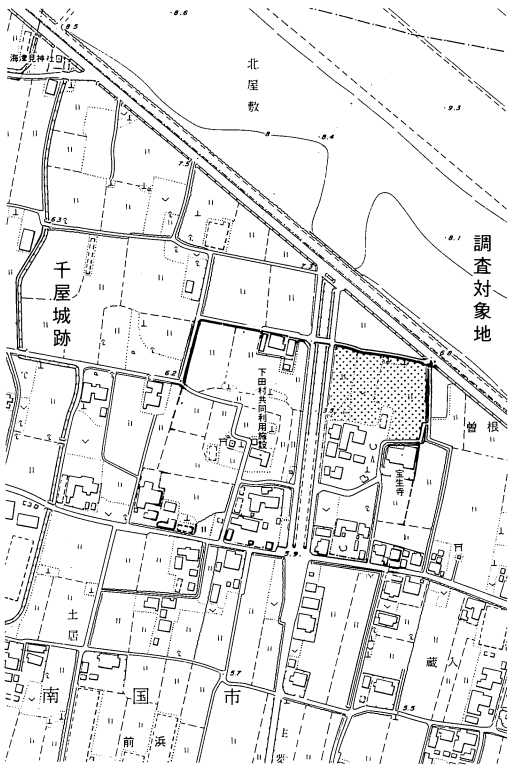
調査地点は，立ち会い調査も含めて６地点であり，このうち前浜地区は，付近に千屋城跡のある関係から微地形測量を実施した後立ち会い調査を行った。他の５地点については，トレンチ調査を行い，西見当地区と末通し地区については，全面発掘調査を実施した。

調査地点　面積・期間一覧表

No	地点名	調査面積	調査期間
1	前浜	10㎡	昭和60年１月21日～１月22日
2	正善	20㎡	〃　１月23日～１月31日
3	徳升	15㎡	〃
4	西見当	30㎡	〃　12月23日
5	堂の西	128㎡	〃　12月24日～12月20日
6	末通し	216㎡	昭和61年１月６日～１月17日



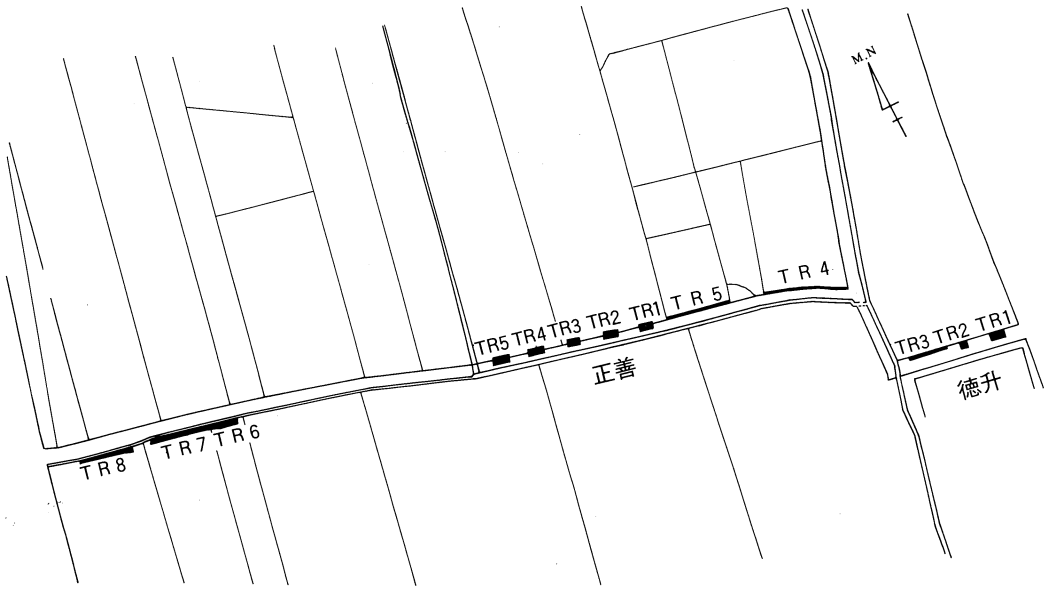
Fig 2　発掘調査地点位置図



前浜(三ノ戸)地区位置図



徳升,正善地区位置図



徳升,正善地区トレンチ設定図 $\frac{1}{600}$

Fig 3 調査地点位置図

Ⅱ　前浜地区の調査

1　位　　置

調査対象地は，南国市前浜字三ノ戸である。県道前浜・植野線地下道の東側に位置しており，北側は高知空港の場周道路に接している。現状は，水田地及び畑地等である。

県道を隔てて西側には，千屋氏の居館である千屋城跡が所在しており，調査対象地には，千屋城跡の的場であると伝えられている円形の土壇が存在している。

調査対象地は，千屋城跡の郭内に位置すると考えられることから，今回の調査を実施するに至った。

2　調査の内容

調査の契機となった，農道改修工事及び水路改修工事は，極めて小規模な範囲で実施されるため，立会調査及び調査対象地周辺の地形実測図（縮尺$\frac{1}{200}$・25cmコンター）の作成を実施した。

立会調査では，遺物の出土はみられなかったが，地形実測図の作成によって新たな知見を得ることができた。以下，その内容を記すことにしたい。

(1)

「的場」の伝承をもつ円形の土壇は，標高6.00mを基底ラインにした，東西5.40m，南北6.40mの楕円形を呈しており，一段の段状部が認められる。段状部は，直径約３m高さ50cmを測り，上部は平担面になっている。「的場」の高さは，裾部から約2.00mを測ることができ，上部に祠が置かれている。「的場」の表面観察からは，人工的な盛土によって築かれているものであると考えられるが，古墳等に該当する内容のものではないと判断される。耕作地のなかで，「的場」だけが開墾されずに遺存していることは，「的場」に由来する伝承の強さを物語るものであろう。

(2)

調査対象地の中央部には，標高6.00mを基底ラインにした，東西方向の土塁状の地形が所在している。土塁状の地形は，幅２m高さ50～75cm長さ24mの範囲で残存しており，西端はＴ字型を呈して南方向の畦道につながっている。また，土塁状地形の南側は，墓地となっており，土塁状地形の一部が削平化されている。

(3)

土塁状地形の周辺では，標高6.00mのラインによる細長い畝状の地形が認められ，土塁状地形に連結した旧地形が所在していたことがうかがえる。また，この細長い畝状の地形は，土塁状地形に直交及び平行するものであることから，規格性をもった地形が存在して

いたことが推測される。土塁状地形は，土塁の残存部とも考えられることから，「的場」の存在と併せて，千屋城跡に関連した遺構の一部が遺存している可能性が強いものと考えられる。

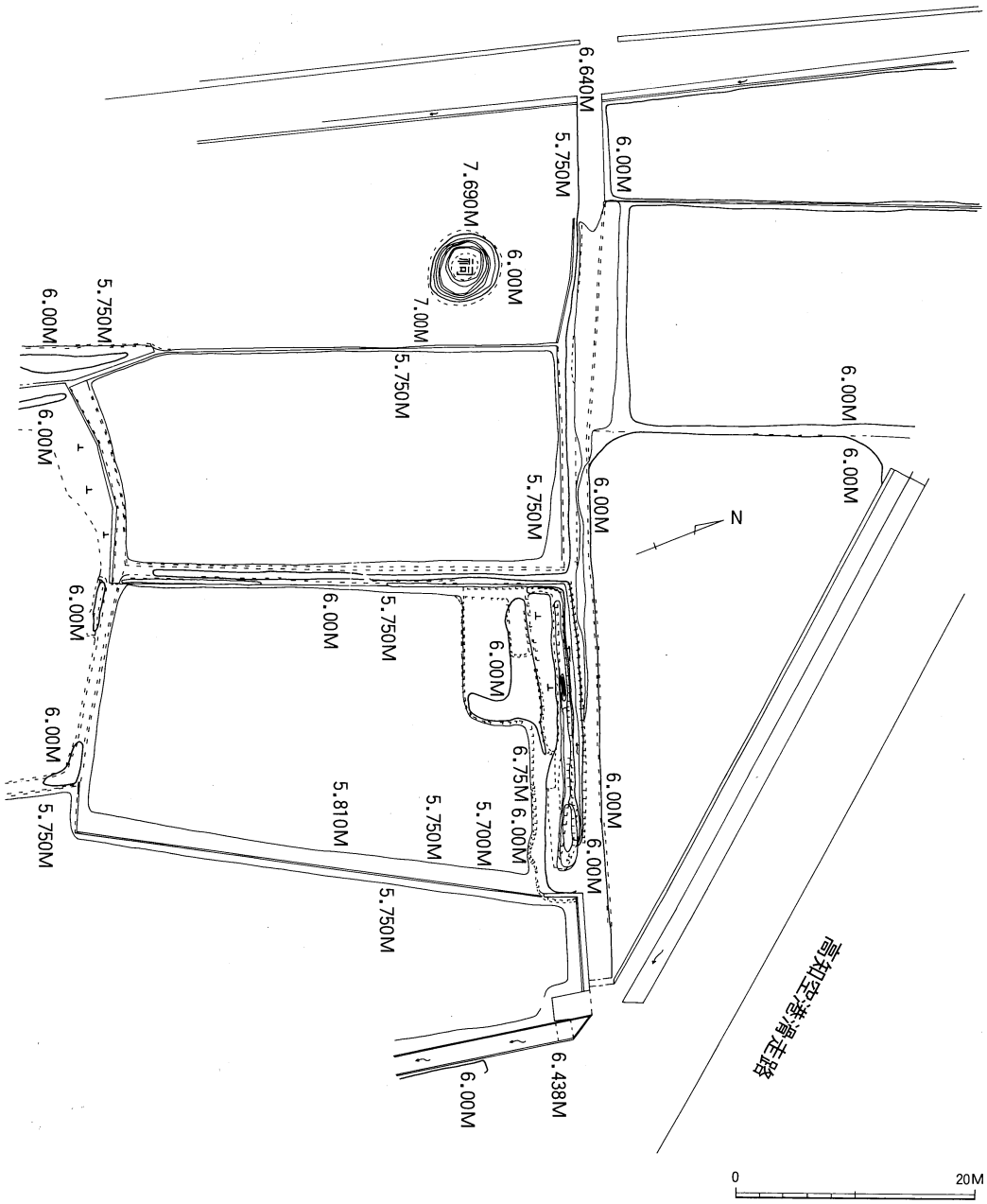


Fig 4　前浜字三ノ戸地区 地形実測図

Ⅲ　徳升地区の調査

1　位　　置

調査対象地は，南国市田村字徳升である。県道前浜・植野線の西側で，田村川の東側部に位置しており，現状では，畑地及び水田地となっている。

田村遺跡群の北端部に該当する場所であると考えられており，調査対象の南側には，守護代細川氏の居館である田村城館跡が所在している。

2　調査の内容

調査は，農道及び水路の改修工事予定部分について，トレンチ方式で発掘区を設定し，遺構及び遺物包含層の検出作業を行った。調査対象地の総発掘面積は，15㎡である。

トレンチは，調査対象地に５ヶ所設定し，東側から順にＴＲ１～ＴＲ５の名称を冠した。調査の結果，ＴＲ３から遺跡が，またＴＲ４から不整形土壙が検出され，遺物が出土した。

3　検出遺構

ＴＲ３から，溝２条が検出された。溝は，第３層茶灰色粘質土に掘り込まれているもの（溝１）と，第４層暗褐色粘質土に掘り込まれたもの（溝２）とに区分される。溝１は，近世以降の開墾時に形成された溝跡であると判断されるが，溝２は出土遺物からみて，室町時代～戦国時代にかけて機能した溝跡であると考えられる。溝２の埋土中からは，土器断土器（皿・11），瓦質土器，備前焼（壺・13），土錘（12）とともに，奈良時代末～平安時代に属する須恵器（甕・14，15）が出土した。

ＴＲ４から検出された不整形土壙は，トレンチの東端で検出されたもので，茶灰色粘質土が埋土となっていた。遺構は，黒褐色粘質土を掘り込んだもので，埋土中から，土師質土器（皿），瓦質土器（鍋），白磁（皿）が出土した。

なお，ＴＲ１・２・５からは，遺構及び遺物包含層が検出されなかった。

4　調査のまとめ

５ヶ所に設定したトレンチのうち，ＴＲ３及び４から溝２条，不整形土壙１を検出することができた。

溝２及び不整形土壙から出土した遺物の内容から，室町時代後半から戦国時代初頭にかけての遺構が形成されていることが判明し，発掘区の周辺には中世の遺構が存在することが明らかとなった。

また，奈良時代末～平安時代に属する遺物がＴＲ３から出土しており，周辺に遺構が形成

されていることが推測される。

なお，今回の調査では，弥生時代の遺構は検出されなかった。

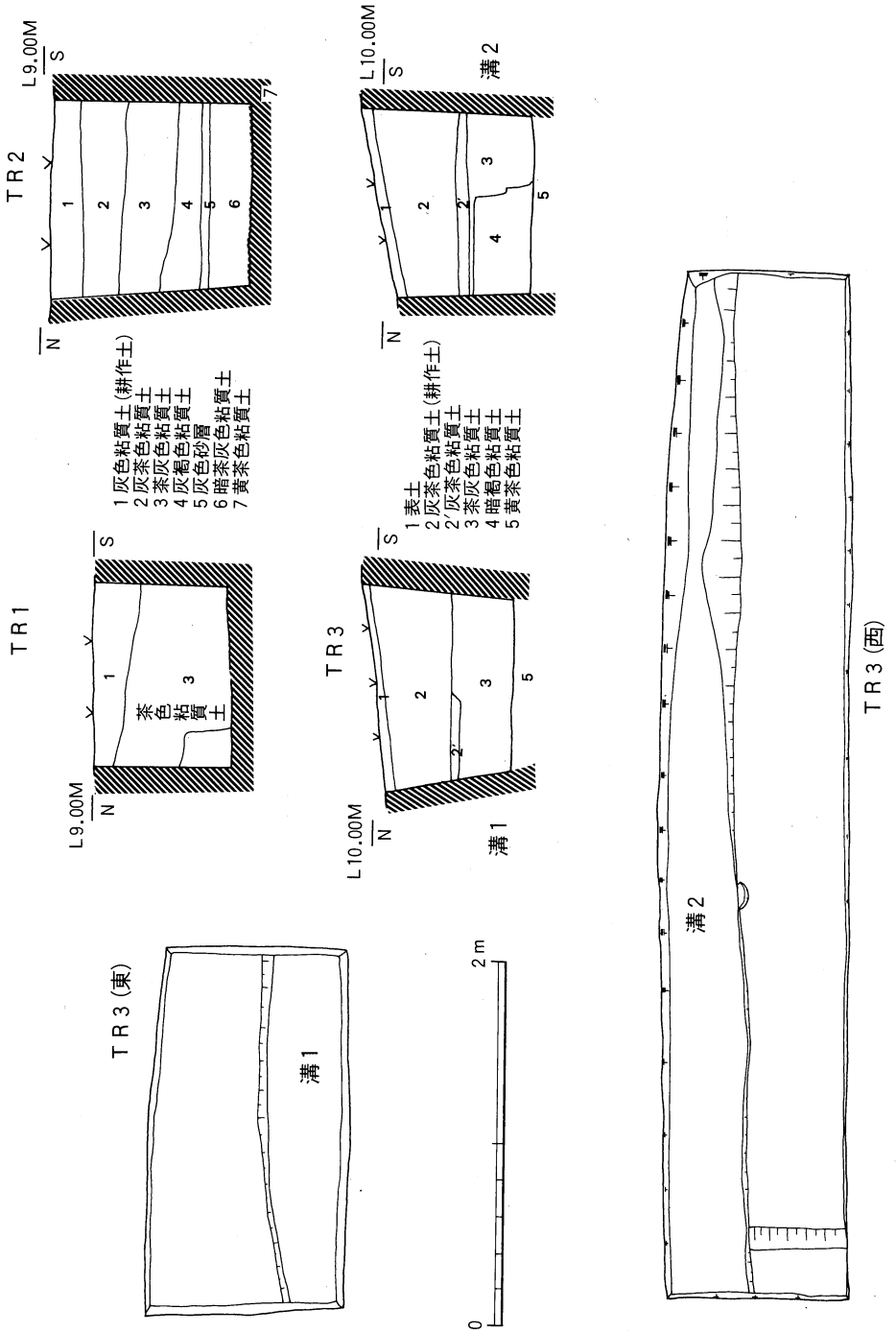


Fig 5 徳升TR1～3

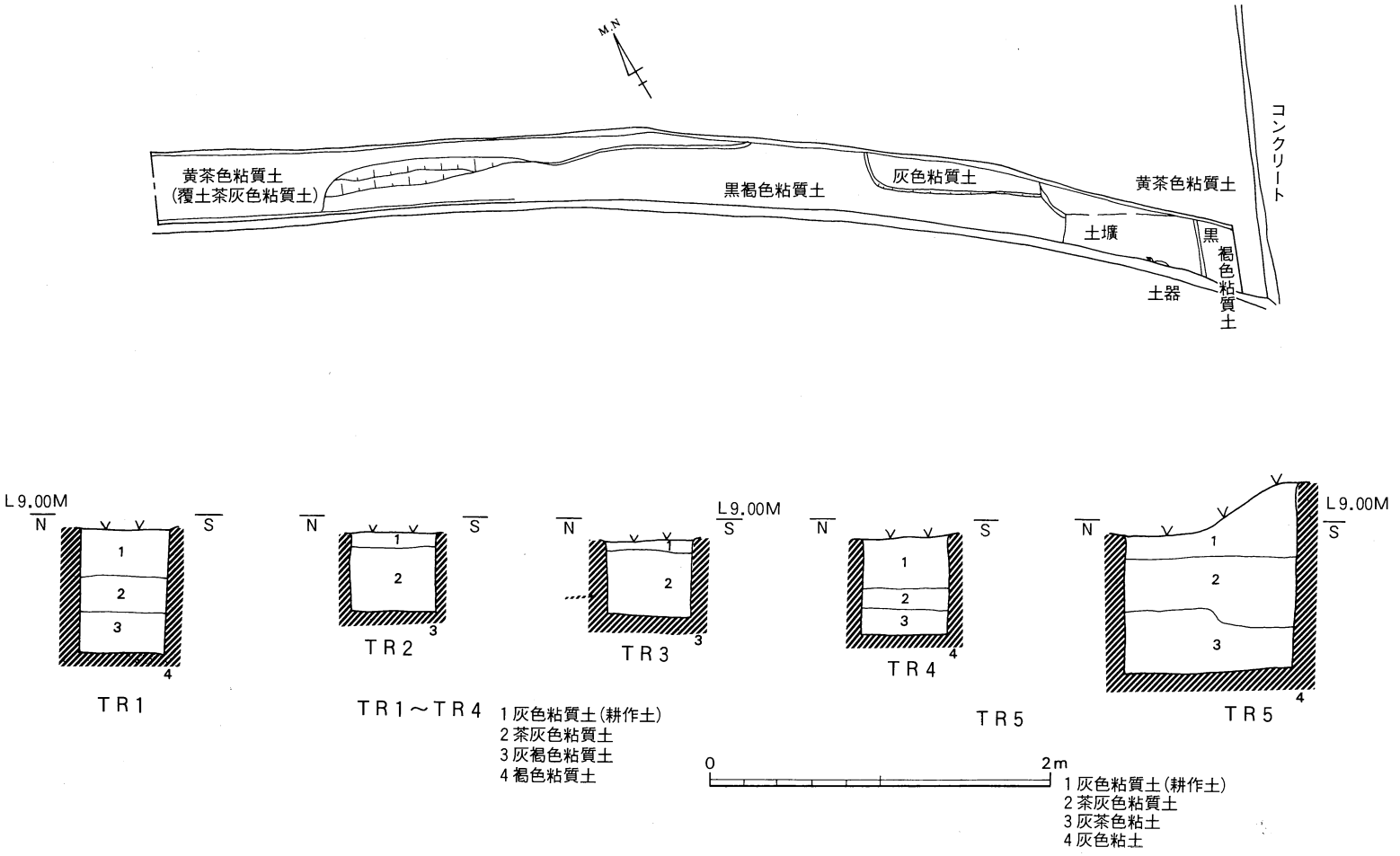


Fig 6 徳升地区TR4平面図・正善地区TR1～TR5土層断面図

Ⅳ　正善地区

1　位　　置

調査対象地は，南国市田村字正善である。徳升地区の西側部に位置しており，現状は水田地となっている。

正善は，室町時代に建立された正善庵[(1)]の所在地と考えられている場所であり，田村城館跡の北側部に位置している。

なお，正善からは明治15～16年頃に銅鐸が出土しており[(2)]，青銅器出土地点としても知られている。

2　調査の内容

徳升地区に継ぐ水路改修予定地について，８ヶ所のトレンチを設定して遺構及び遺物包含層の検出作業を実施した。なお，発掘区は東から順にＴＲ１～８の名称を冠することとした。調査対象地の総発掘面積は20㎡である。

調査の結果，ＴＲ１及び２から中世に属する遺物が，また，ＴＲ６及び７から弥生時代の土器及び石器が出土し，竪穴住居址，ピットが検出された。

3　検出遺構

ＴＲ６及び７から竪穴住居址１棟，ピット５個が検出された。竪穴住居址は，ＴＲ６の東端で検出されたもので，幅0.80m長さ4.80mの範囲で確認された。住居址のベースは，第７層暗褐色粘土層で，覆土は第５層暗茶灰色粘質土及び第６層黄茶色粘質土である。第５層は炭化物を多量に含んだ粘質土で，住居址内に堆積した第６層の上面では炭化物が集中して検出された。また，第６層上面からは弥生土器及び石器が出土した。

住居址内から出土した遺物の内容は，次のとおりである。

弥生土器　壺（１～６，８）　　石器　叩石（９，10）
　　甕（７）　　石鏃（11）

弥生土器は，口縁部に粘土帯を貼付して指頭押圧を施した壺（１，２）の他に，壺頸部（３，４），壺胴部（５，６），壺底部（７，８）がみられる。土器は，田村Ⅳ期[(3)]に所属時期が求められ，弥生時代中期後半の遺物であると考えられる。

石器は，砂岩製の叩石（９，10）及びサヌカイト製の石鏃（11）が出土した。

住居址は，表土下約70cmで検出されたもので，床面から貯蔵穴（長さ1.50m幅0.40m以上）及びピット（径14cm前後，深さ15～20cm）が，また，壁際に幅14cm深さ５～８cmの溝が巡らされていることが明らかとなった。なお，住居址の面側に接して，計５個のピット（径20～

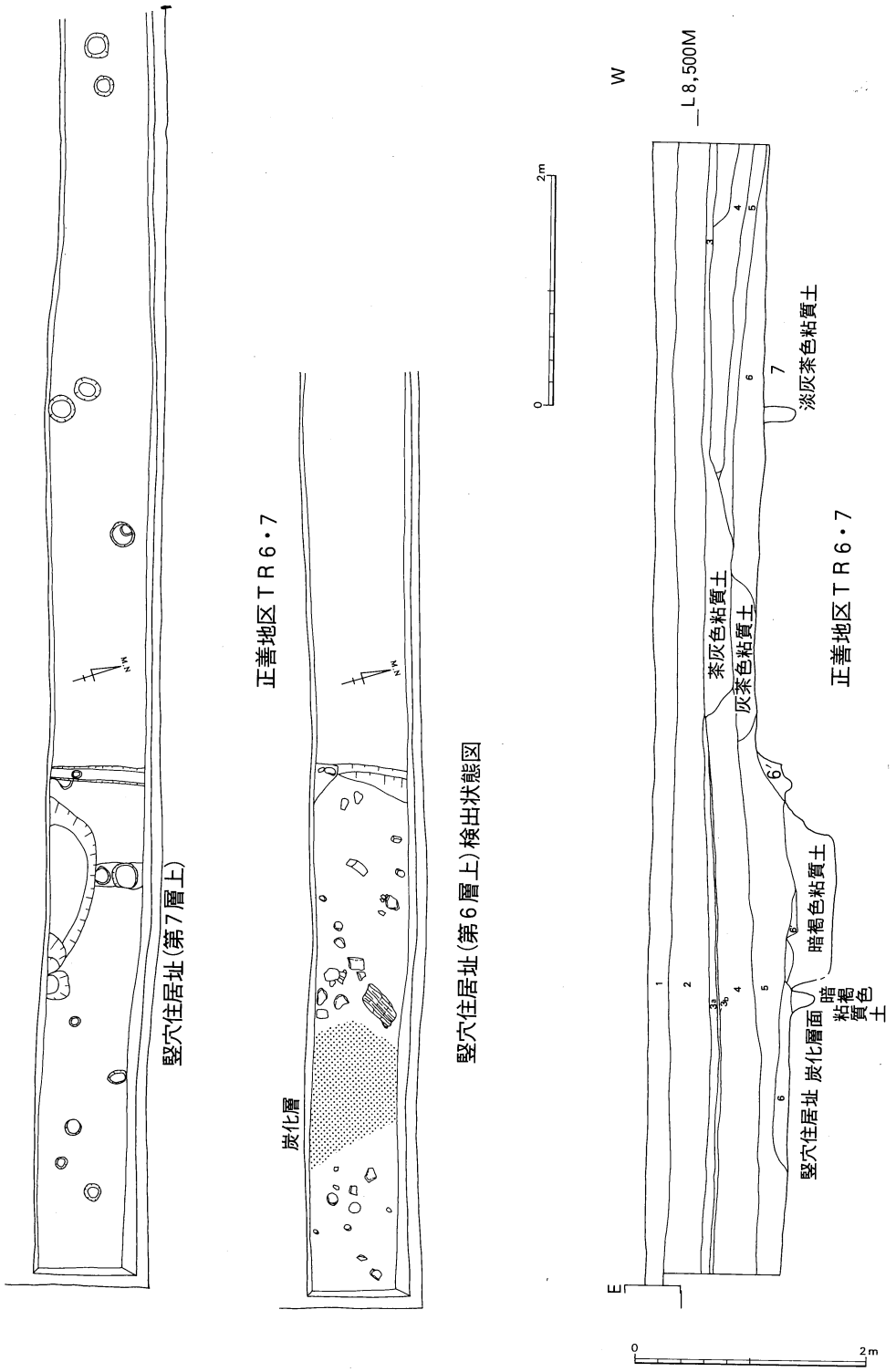
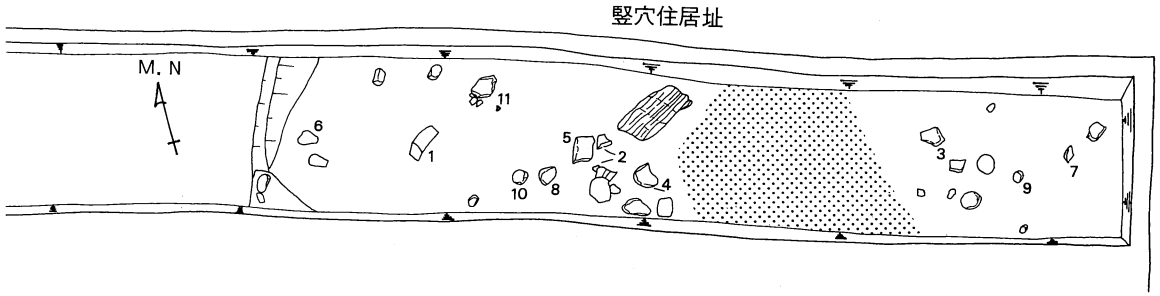
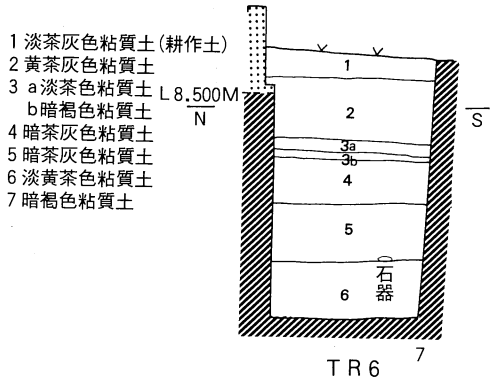


Fig 7　正善地区TR6・7　平面図及び断面図



遺物出土状態図,正善地区　ＴＲ６

0　2m



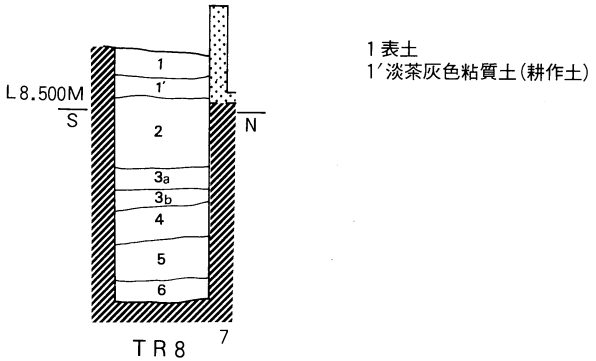


Fig 8　正善地区ＴＲ６竪穴住居址平面図　ＴＲ６・７土層断面図

24cm，深さ16～30cm）が検出されている。また，ＴＲ８からは弥生時代の遺構及び遺物包含層は検出されなかった。

4　調査のまとめ

調査によって得られた成果をまとめると，次の如くである。

(1)

ＴＲ６，ＴＲ７から竪穴住居址１棟，ピット５個が検出された。竪穴住居址は，部分的に確認されたものであるが，床面に貯蔵穴及びピットをもち，壁構を有していた。また，竪穴住居址の西側では，柱穴の一部であると考えられるピットが検出されており，発掘区周辺に遺構が形成されていることが明確となった。なお，出土遺物の内容から，弥生時代中期後半の集落跡が存在していたことが明らかとなった。

(2)

ＴＲ１及び２からは，弥生時代の遺構及び遺物包含層は検出されなかったが，第２層茶灰色粘質土中から，土師質土器（鍋・22，杯・24～26），白磁（碗・23），瓦片（21）等が出土し，発掘区周辺に中世の遺構が形成されていることがうかがわれた。遺物の内容から，田村城館跡又は正善庵に関連する遺構が形成されていることが考えられる。なお，ＴＲ３～５，８からは遺構及び遺物包含層は検出されなかった。

(3)

弥生時代の遺構形成は，ＴＲ６及び７周辺で確認されたものの，ＴＲ１～５からは検出されておらず，田村遺跡群の弥生時代集落跡のなかで，ＴＲ１～５周辺は集落外に位置することが考えられる。

註

(1)　山本　大　「土佐国田村庄種子名と正善について」　『土佐史談』復刊57号（通刊 136号）昭和48年12月　土佐史談会

(2)　梅原末治　「田村銅鐸（第８章第５節土佐の銅鐸）」　『銅鐸の研究』　昭和２年７月　大岡山書店

岡本健児　「青銅器の出現（第三章第四節）」　『高知県史・考古編』　昭和43年２月　高知県（梅原末治博士の銅鐸実測図が掲載されている。）

岡本健児　「正善出土の銅鐸（第三章第三節　高地性集落のみられる時期）　『南国市史・上巻』昭和54年10月

正善から出土した銅鐸は，佐原編年による突線鈕式２式鐸であり，近畿式鐸のＩＡ式と呼称されるものである。南国市田村字正善1163及び 169番地から，明治15～16年頃吉本銀次郎氏によって発見された。現在，兵庫県西宮市の辰馬考古資料館に保管されている。

(3)　『田村遺跡群』　昭和61年３月　高知県教育委員会

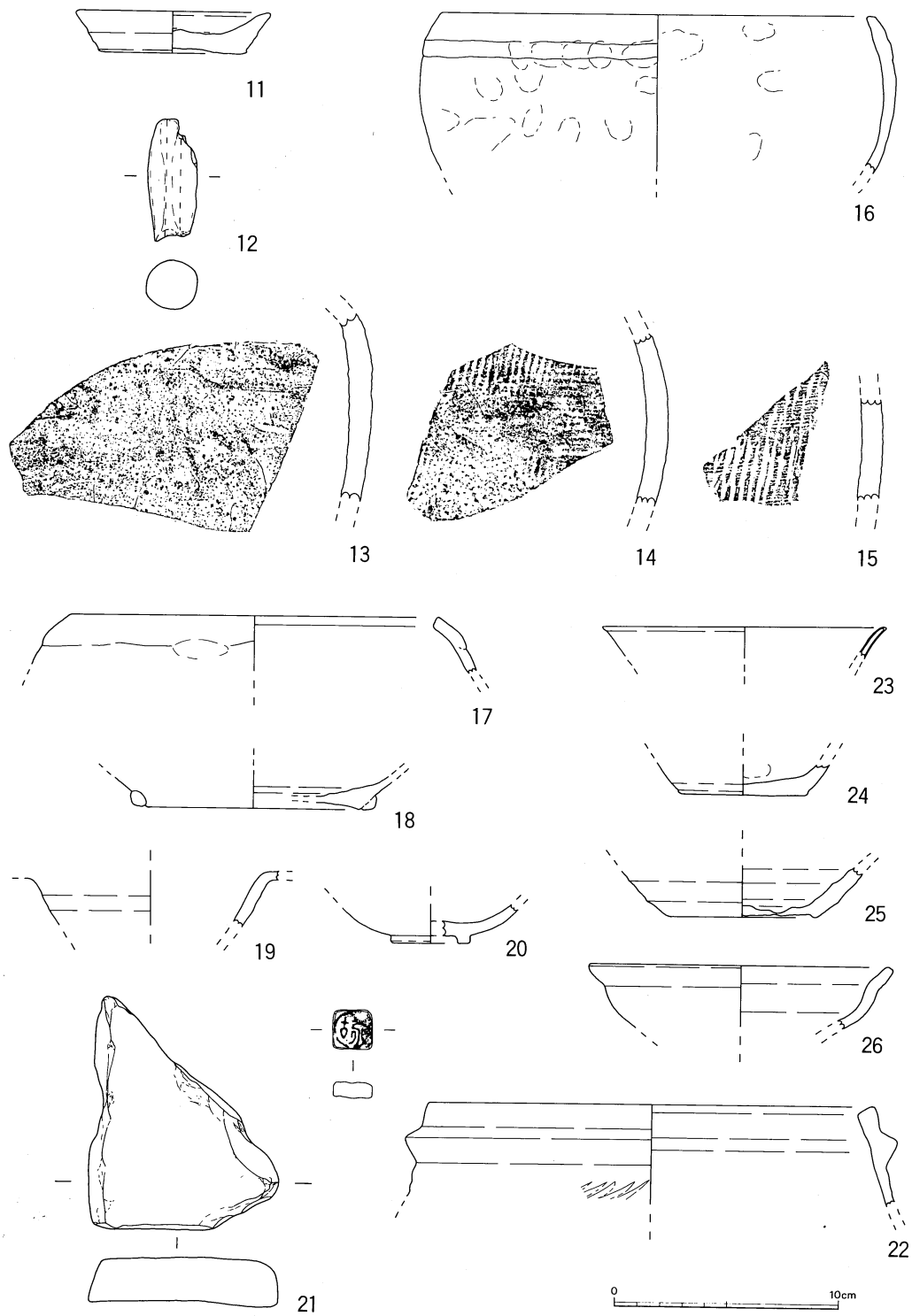


Fig 9　11～20徳升地区ＴＲ４　21，22正善地区ＴＲ１　23～26正善地区ＴＲ２

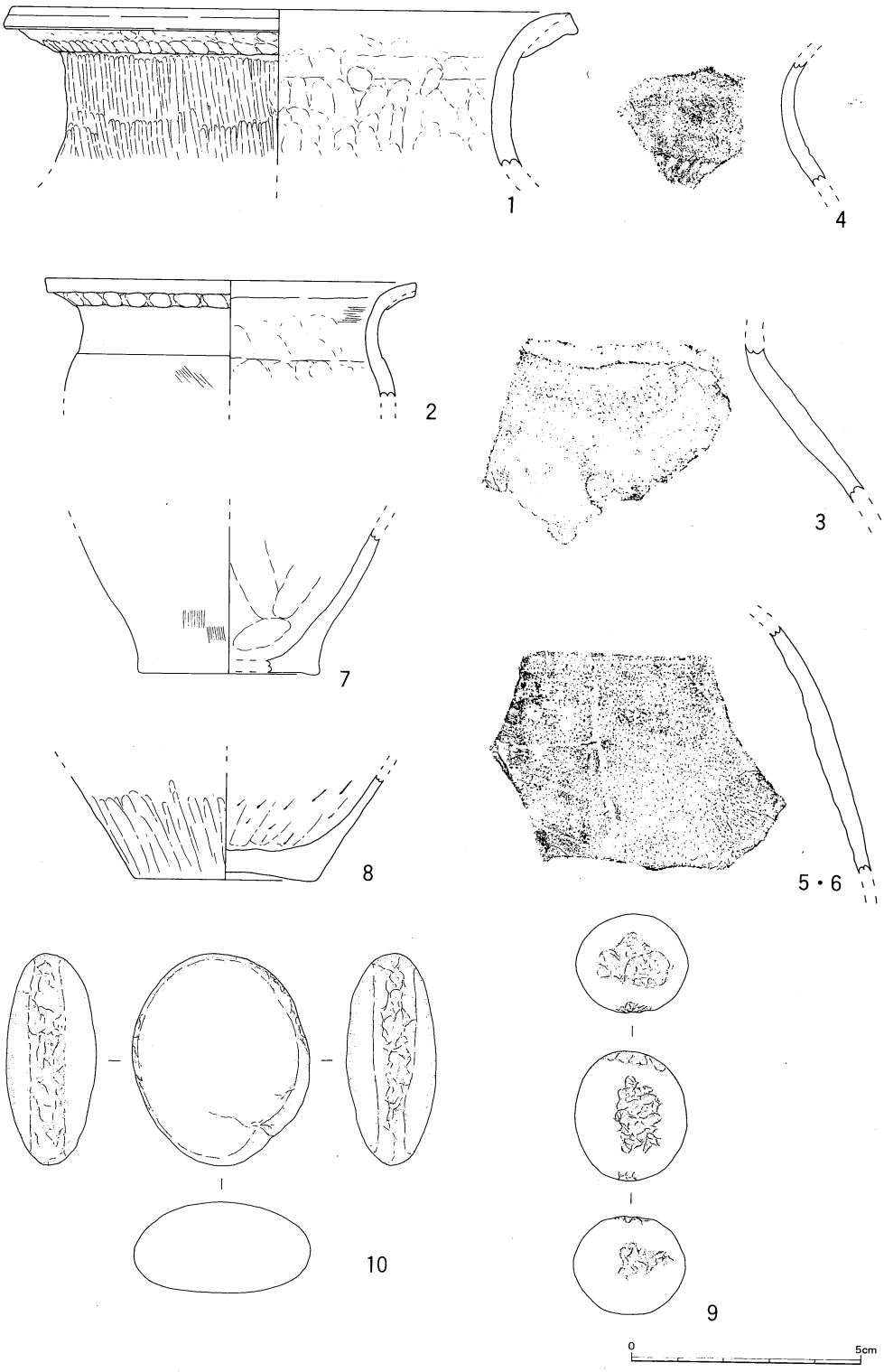


Fig 10 出土遺物実測図　正善地区ＴＲ５竪穴住居址

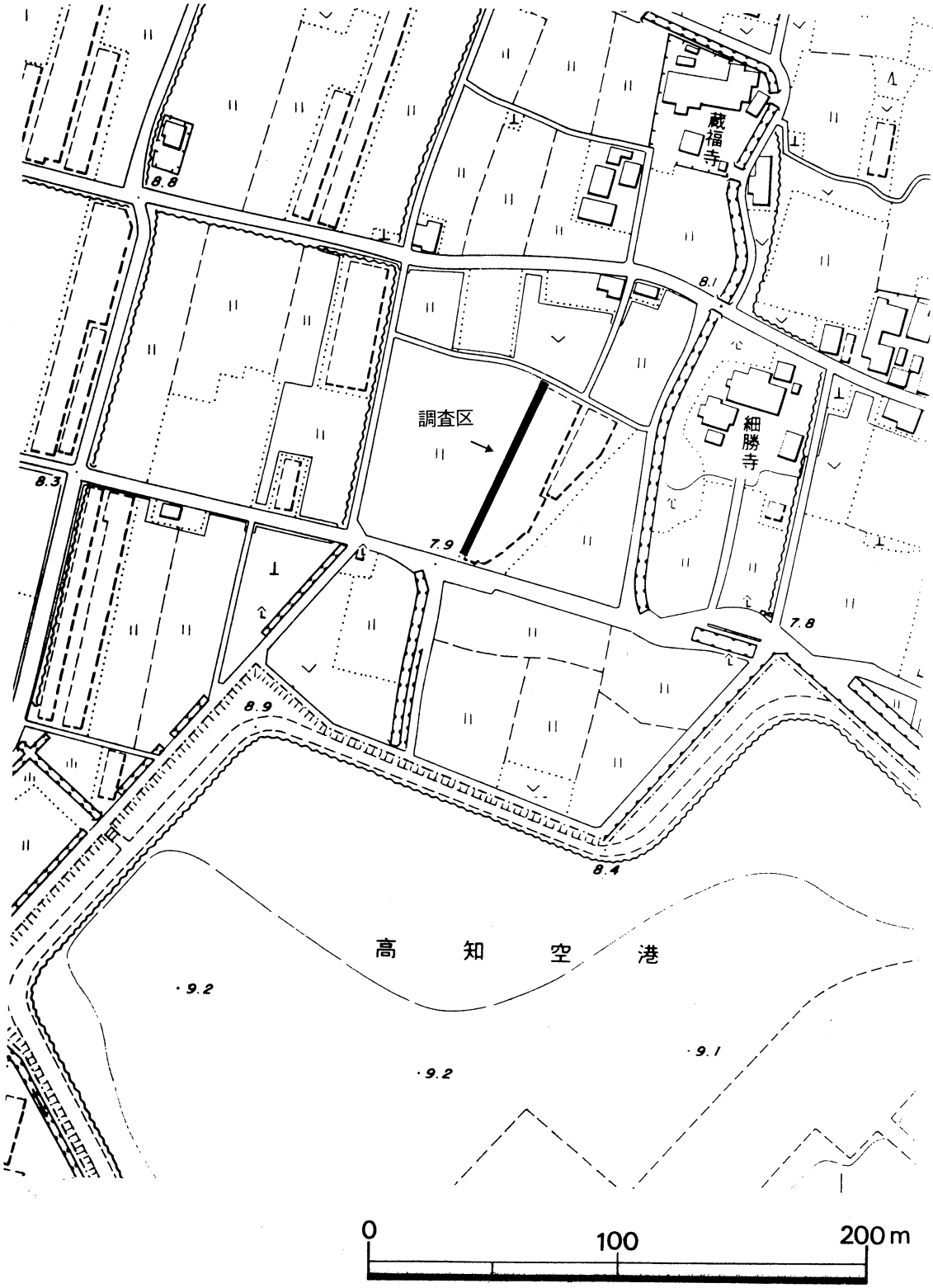


Fig 11 西見当地区

V　西見当地区の調査

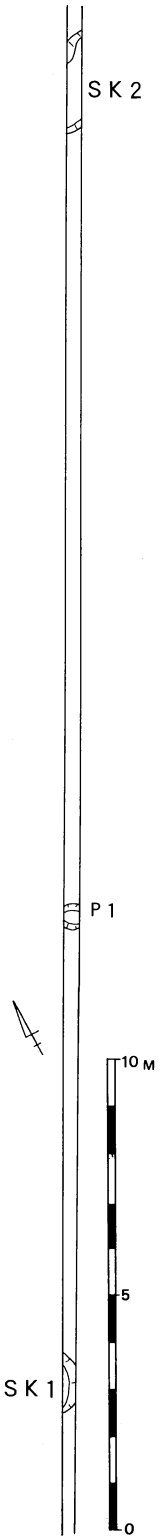


Fig 12 西見当地区検出遺構全体図

西見当遺跡は，昭和30年以来数次にわたる調査により，弥生時代前期（田村前期Ⅱ）に成立した環濠集落として著名な遺跡となった。なかでも昭和55年から58年まで実施された高知空港拡張整備事業に伴う発掘調査では，Loc.44として位置づけられ環濠の南限と北限を確認することができた。環濠は円環状をなさず東に開口しており，環濠内の面積は約17,500㎡を測る。環濠内からは，住居址を検出することはできなかったが，多くの貯蔵穴を確認することができた。

今次調査区は，南側を囲む環濠の東端部よりも約25m東よりの地点であり，環濠外に位置する。調査は，水田側溝の改修に伴うもので，長さ75m，幅 0.4mの細長い調査区である。10～15cmの耕作土をはぐと黒褐色の遺物包含層があり，その下が遺構検出面の黄褐色シルト層（地山）である。場所によっては，遺物包含層がなく耕作土下がすぐに地山になっているところもある。今次調査では，弥生前期の土拡２基とピット１個を検出することができた。しかしながら，調査面積があまりにも狭隘なために検出遺構を完全なかたちで調査することができず，遺構の性格を把握することができなかった。

1　包含層出土の遺物

(1) **土器**　1は，田村前期Ⅲの壺である。内側に直線的に立ち上がる胴部から，口縁部がく字状に鋭く外方に屈曲する。胴部上端と中位に一条のヘラ描沈線をめぐらし，胴部に上弦の重弧文を施す。断面には，外傾接合痕が認められる。２は，田村前期Ⅲの壺底部である。色調は共に有通の淡灰茶色を呈す。

(2) **石器**　7は，片刃の石包丁であり片側縁の一部が欠損しているが，ほぼ完形をとどめている。長さ 9.2cm，幅 4.5cm，厚さ 0.8cmを測る。粘盤岩製である。器面調整の擦痕が随所に見られ特に刃部に著しい。孔は一つで，周辺には叩打痕が著しく残っている。中期に属する。8・9は，太型蛤刃石斧である。8は，長さ11.8cm,幅6.4

cm，厚さ 4.8cmである。刃部は斜めになっているが，使用による磨耗の結果と考えられる。右主面の刃部は，かなり破損している。9は，刃部が欠損している。全面に研磨痕が見られないところから，未製品の段階で欠損し，廃棄された可能性もある。残存長14cm,幅8.1cm，厚さ 5.6cmを測る。石材は，共にみかぶ緑色岩である。また，6は，チャートのフレークである。

2　検出遺構及び遺物

ＳＫ１

深さ24cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は認められなかった。

ＳＫ２

深さ28cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は，甕３・４が出土している。３は如意形に外反する口縁部を有し，面をなす口唇部には上端に浅く下端に深い刻目を施している。頸部には２条のヘラ描き沈線を配する。胴部外面及び口縁部内面は，横方向のハケ調整，口縁部から上胴部内面には，指頭によるナデ調整が見られる。共に田村前期Ⅲに属する。

Ｐ１

径60cm，深さ28cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で，遺物は，甕（５）が出土している。口縁部は如意形に外反，口唇部は丸味を持っておさめ，全面に刻目を施す。

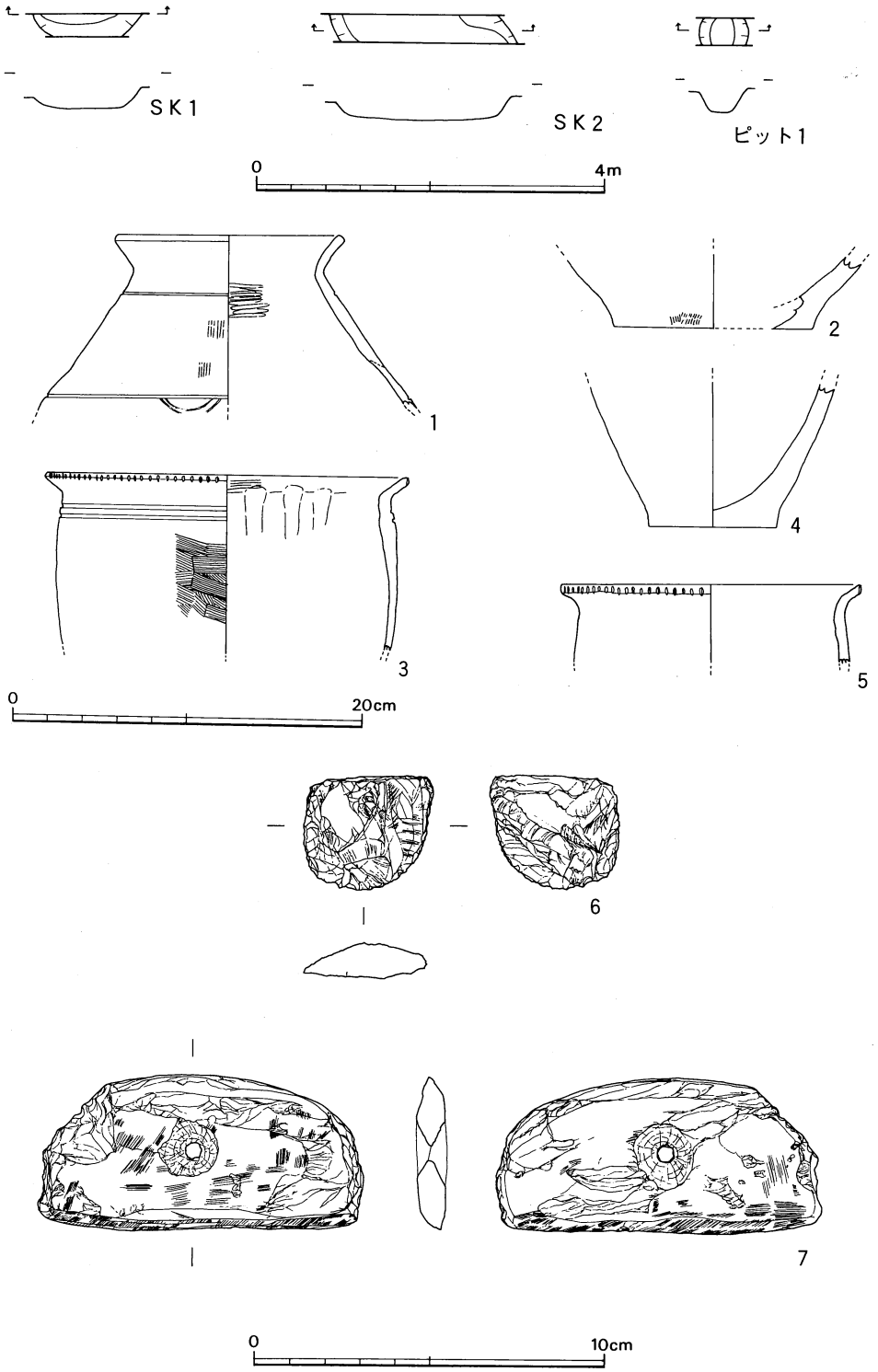


Fig 13 西見当地区遺構及び土器・石器実測図

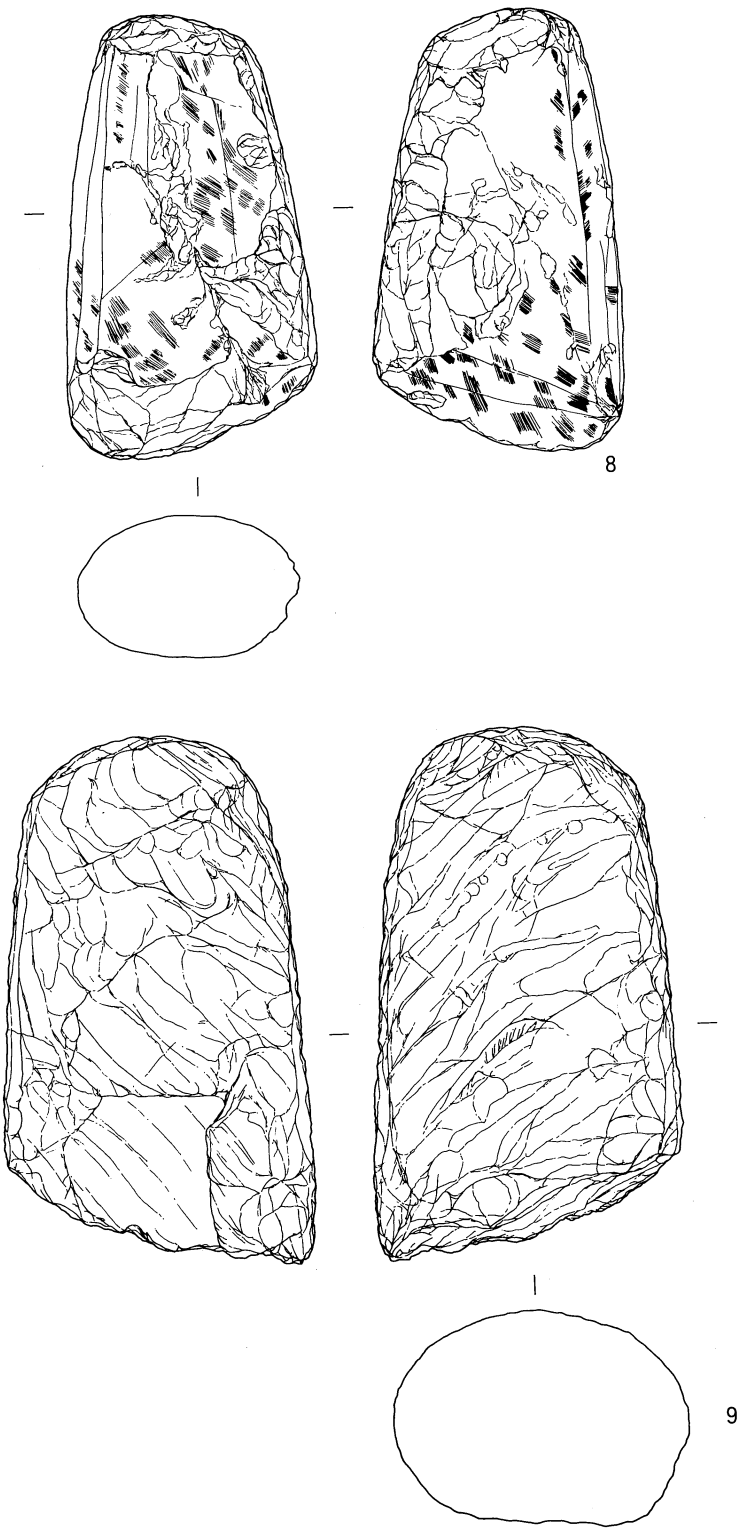


Fig 14 包含層出土石斧

Ⅵ　末通し地区の調査

1　位置と環境

末通し地区は，田村遺跡群の西端部に位置し，高知空港拡張整備事業に伴う発掘調査によって周辺の遺跡の状況が明らかになっている。北に隣接する田中地区からは，弥生時代中期～後期の竪穴住居24棟，土壙墓，壺棺墓21基が確認されている。また南 150ｍのシマイテン地区からは縄文時代後期の良好な遺物包含層が確認されている。調査区の海抜は，7.6ｍを測り，南に向かって緩かに下降している。前回の調査によれば，当地点とシマイテンとの間には，幅50ｍ以上にわたる弱い落ち込みが確認されており当発掘区は，田中地区から南へ続く中後期の集落がのっている微高地の南端部に位置すると考えられる。

発掘調査は，東西に直線的に伸びる農道と水路の拡幅工事に伴うもので，幅２ｍ，長さ108ｍ，面積 216㎡を測る帯状の調査区である。遺跡の現状が道路であるために，遺構面はかなり近現代の攪乱を受けており，遺構の残存状況は，あまり良好ではない。

2　基本層序

20～30㎝の表土層を除くと厚さ10㎝前後の中世～弥生時代の遺物包含層があり，その下が遺構検出面である。遺構検出面は，黄褐色シルト層であり，周辺の弥生時代の基盤と同様である。調査区の東$\frac{1}{3}$の部分は，比較的包含層の残りが良いが，西部においては，攪乱拡が基盤にまで達しており，遺構の遺存状況はよくない。

3　検出遺構

(1)　竪穴住居

ＳＴ１

調査区西部に位置する円形住居址で，ＳＫ３を切っている。半分以上が調査区外に出ているが，径5.26ｍ，深さ26㎝，面積22㎡を測る。東壁ぎわに幅14㎝，深さ６㎝の壁溝がめぐっているが，西壁には見られない。埋土は，Ⅰ層：暗茶色粘質土，Ⅱ層：淡灰茶色粘質土，Ⅲ層：灰茶色粘性土である。床面は，平坦をなし，５つのピットが存在する。主柱穴はＰ１，Ｐ２，Ｐ３で，柱穴間距離は，Ｐ１－Ｐ３が２ｍ，Ｐ３－Ｐ４が 1.6ｍを測る。床からの深さは，９～17㎝である。Ｐ５は中央ピットで，楕円形のプラン，断面逆台形をなすと考えられるが半分以上が調査区外に出土している。炉址として使用された痕跡はみられない。

出土土器は，壺（１～７），甕（８～12・20～22），高杯（18），蓋（17），壺底部（13・15），甕底部（14），鉢（16・19）である。これらのうち，壺（６），甕（９），蓋（17）

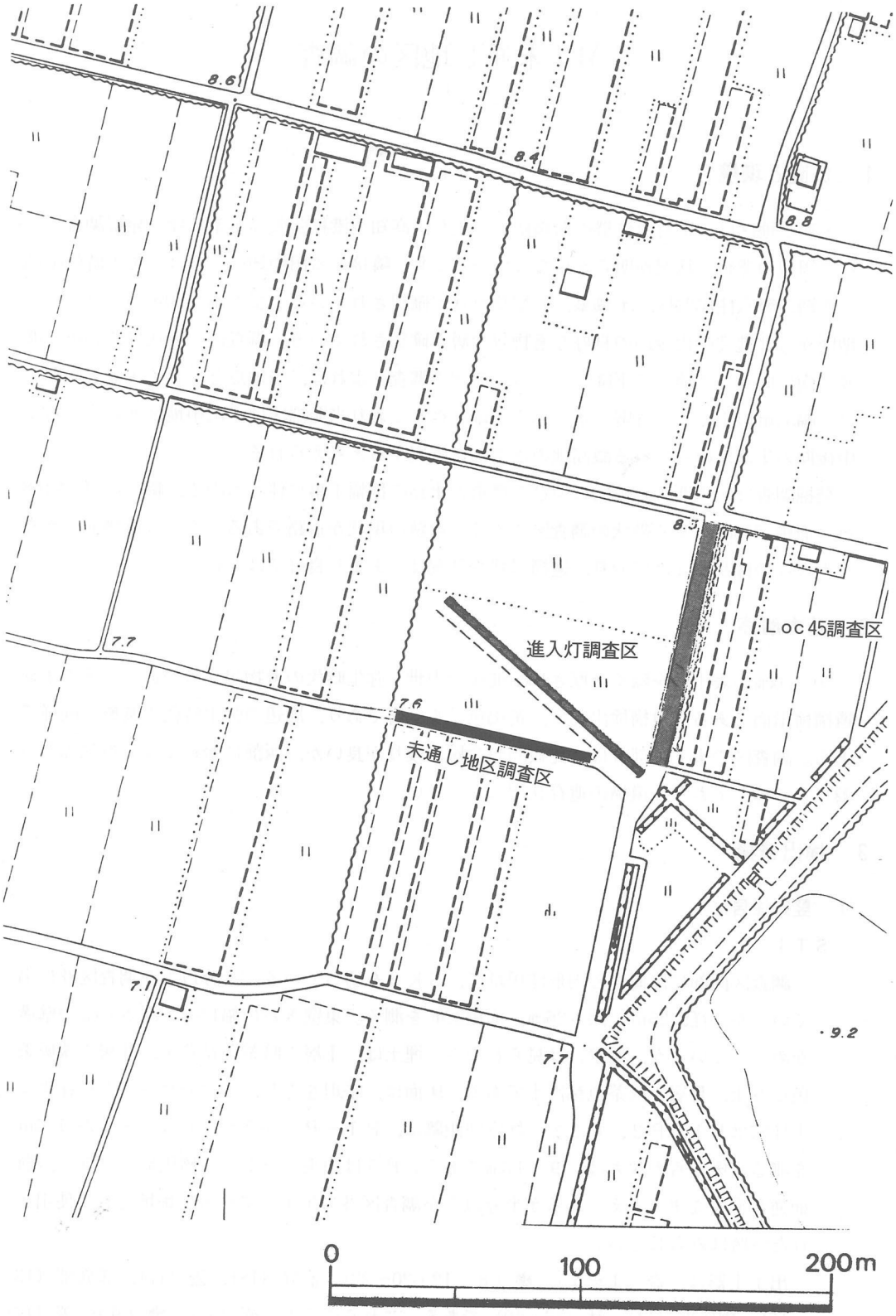


Fig 15 未通し地区調査区

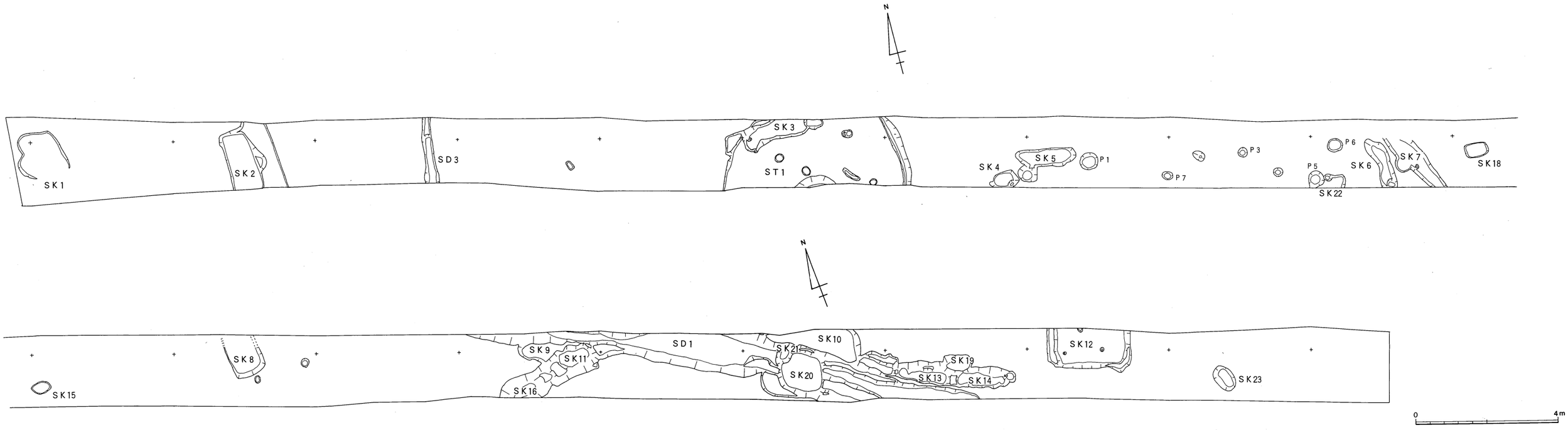


Fig 16 未通し地区検出遺構全体図

高杯（18）は，床面にへばりついた状態で出土しているが，他の土器は，検出面から埋土Ⅰ層に集中して出土している。床面出土のものは，ＳＴ１廃棄時のものである。他の土器は，集中的な出土状況から考えて，プランで確認することはできなかったが，ＳＴ１の埋没後に掘り込まれた土壙の一括遺物である可能性も否定できない。断面図埋土Ⅱ層の立ち上りを，それと考えられなくもないからである。なお，壺１は，それとは別の原因で混入したものであろう。

石器は，石包丁（121）が壁溝ぎわにへばりついた状態で，119が，床より２cm浮いた状態で砥石（126）が床面より出土している。その他，磨石（122～124）砥石（125）が埋土Ⅰ層から出土している。

床面出土土器から田村中期Ⅲ(中)に属する住居址である。

(2) 土壙

ＳＫ１

調査区西端に位置する。不整形のプラントを呈し，長軸1.28m，短軸1.34m，深さ20cmを測る土壙であるが，南壁は削平されており，立ち上りは見られない。埋土は，黒褐色粘質土単純一層である。遺物は，弥生土器細片が，数点出土している。

ＳＫ２

東壁に張り上り部を持つが，床面長方形のプランを有する。一部が調査区から出ているが，長軸1.6m，短軸1.2m，深さ20cmの土壙である。張り出し部は段状に掘り込まれており，床面より12cm上っている。埋土は，黒褐色粘質土である。遺物は弥生土器細片が数点出土しているが，実測可能なものはなく，詳細な時期比定はできない。

ＳＫ３

ＳＴ１に切られており規模を明らかにすることはできないが，ＳＴ１床面下の落ち込み等から，縦に長い遺構で，東端部に若干の落ち込みがある土壙と考えられる。遺物は見られない。

ＳＫ４

不整形のプランを呈し，一部が調査区外に出ている。長軸76cm，短軸48cm，深さ20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土単純一層で，土器脚部（24）が１点出土している。田村中期Ⅱ・古の土壙である。

ＳＫ５

長楕円形のプランを呈し，Ｐ４と切り合っているが，先後関係は不明である。長軸

2.12m，短軸 0.5m，深さ20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。出土遺物は，土器底部（23）の他中期土器細片20数点が出土している。

ＳＫ６

細長い不整形のプランを呈し，南端の一部が，調査区外に出ている。床面は南端部が12cm落ち込んでいる。長軸1.52m，短軸36cm，深さ16cm（28cm）を測る。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。出土遺物は，壺（25，26，27，30），鉢（29），甕（28，31）の他に中期土器細片が 100点余り出土している。これらの土器の中には，内面ヘラ削りのあるものが５点，含まれており，その内の２点には，叩きが見られる。甕（28）は，田村中期Ⅲに属するものであり混入と考えられる。従ってＳＫ６は，田村中期Ⅱ・新の土壙とすることができる。

ＳＫ７

調査区を斜めに切る溝状の土壙であり，両端が調査区外に出ている。床面は平坦であるが，中央部に径10cm，深さ３cmの窪みがある。長軸は不明であるが，短軸62cm，深さ20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。出土遺物は，壺（32～37，40），甕（38，39）の他約40点の弥生中期土器細片が出土している。田村中期Ⅱ・新の時期である。

ＳＫ８

調査区のほぼ中央部に位置し，隅丸長方形のプランを呈する土壙であるが，一部が調査区外に出ている。長さは不明であるが，短軸92cm，深さ34cmを測る。南縁に近接して径20cm，深さ10.5cmの小ピットが存在するが，ＳＫ８と関係があるかも知れない。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。

埋土中及び床面から，完形品に近い多量の壺が出土した。出土状況から見てかなり削平を受けていることが考えられる。壺（41～55），甕（55）の他壺３，甕４，鉢２点など480点の細片が出土しており，これらのうち16点（3.3%）に内面ヘラ削りが認められる。ＳＫ８は，田村中期Ⅲ（中）に属する貯蔵穴と考えられる。

ＳＫ９

ＳＫ11及びＳＤ１に切られており，深さは約８cmと測るが，プラン及び規模をつかむことはできない。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。出土遺物は，弥生・中後期の細片が50点余り出土している。

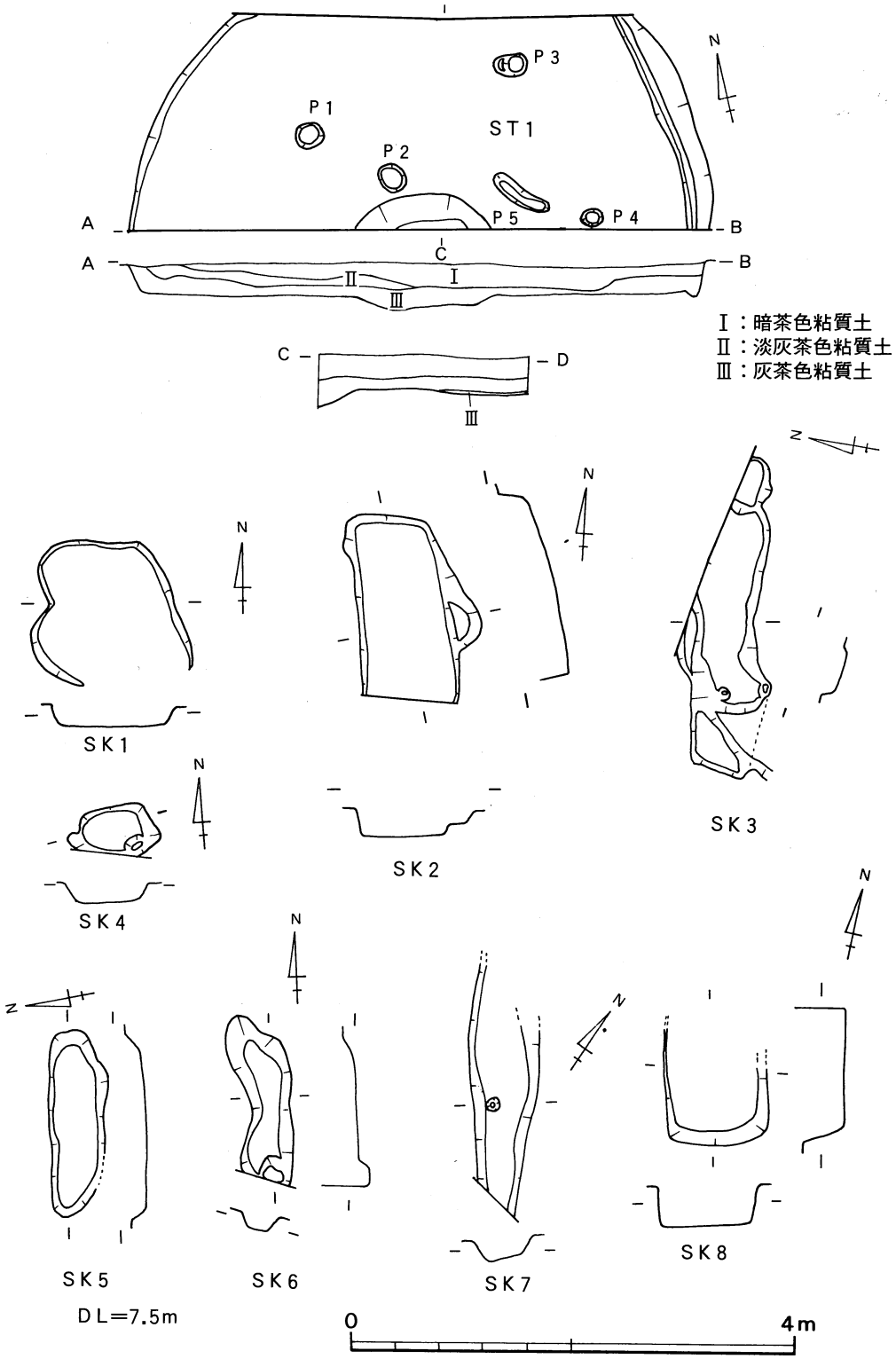


Fig 17 遺構図 ST1, SK1～8

ＳＫ10

隅丸方形のプランを呈し，長軸 2.8m，短軸1.92m，深さ20cmを測る。床面は平坦面をなす。ＳＫ20，21，及びＳＤ１と切り合っている。先後関係を断面及びプランによって明確にすることはできないが，遺物の出土状況と出土遺物から考えて，ＳＫ20，ＳＤ10よりは後出であり，ＳＫ21との先後関係は不明である。出土遺物は，甕（56，58）の他約 100点の田村中期Ⅱ，Ⅲの土器が出土している。ＳＫ10は田村中期Ⅲの土壙である。

ＳＫ11

ＳＫ16と隣接する楕円形を呈する土壙であり，一部が調査区外に出ている。ＳＫ９と切り合っているが先後関係は不明である。長軸2.68m，短軸88cm，深さ32cmを測る。

遺物は，壺（57，59），鉢（61），高杯（60）の他中期土器細片95点が出土している。このうち14点（14%）に内面にヘラ削りが見られる。ＳＫ11は田村中期Ⅲの土壙である。

ＳＫ12

調査区東部に位置し，一部が調査区外に出ているため規模を明確につかむことができないが，一辺 2.3cm程度の方形プランを有する土壙である。深さは56cmを測り床は平坦面をなす。西壁と南東コーナー部は段状を呈す。埋土は，Ⅰ層：淡茶色粘質土，Ⅱ層：濃茶色粘質土，Ⅲ層：シルトのブロックを含む濃茶色粘質土層である。遺物は，壺（63，66，69），甕（62，65），鉢（68）が出土しており，65，62，63，68，66は床面から出土している。この他床面より小型磨石６点，５～10cm大の円礫8点が出土している。壺(63)は，一見古い様相を呈するが，中国山地で後期中葉頃に見られるものであり，[1] 甕(62)は，内面頸部直下からヘラ削りを施しており，新しい様相がうかがえる。ＳＫ12は，後期中葉に比定できる土壙である。

ＳＫ13

ＳＫ14と隣接し，ＳＫ19と切り合っているが，先後関係は不明である。長楕円形のプランを呈し，長軸 1.5m，深さ40cmを測る。埋土は濃茶褐色粘質土単純一層である。床面から高杯の杯部（70）が１点出土している。田村中期Ⅱ・新の時期である。

ＳＫ14

長楕円形のプランを呈し，長軸1.66m，短軸0.64m，深さ21cmを測る。床面は，東端部が５cmほど落ち込んでいる。埋土は，濃茶褐色粘質土単純一層である。遺物は，甕(72）の他中期土器細片が約100点出土している。ＳＫ14は田村中期Ⅲの時期である。

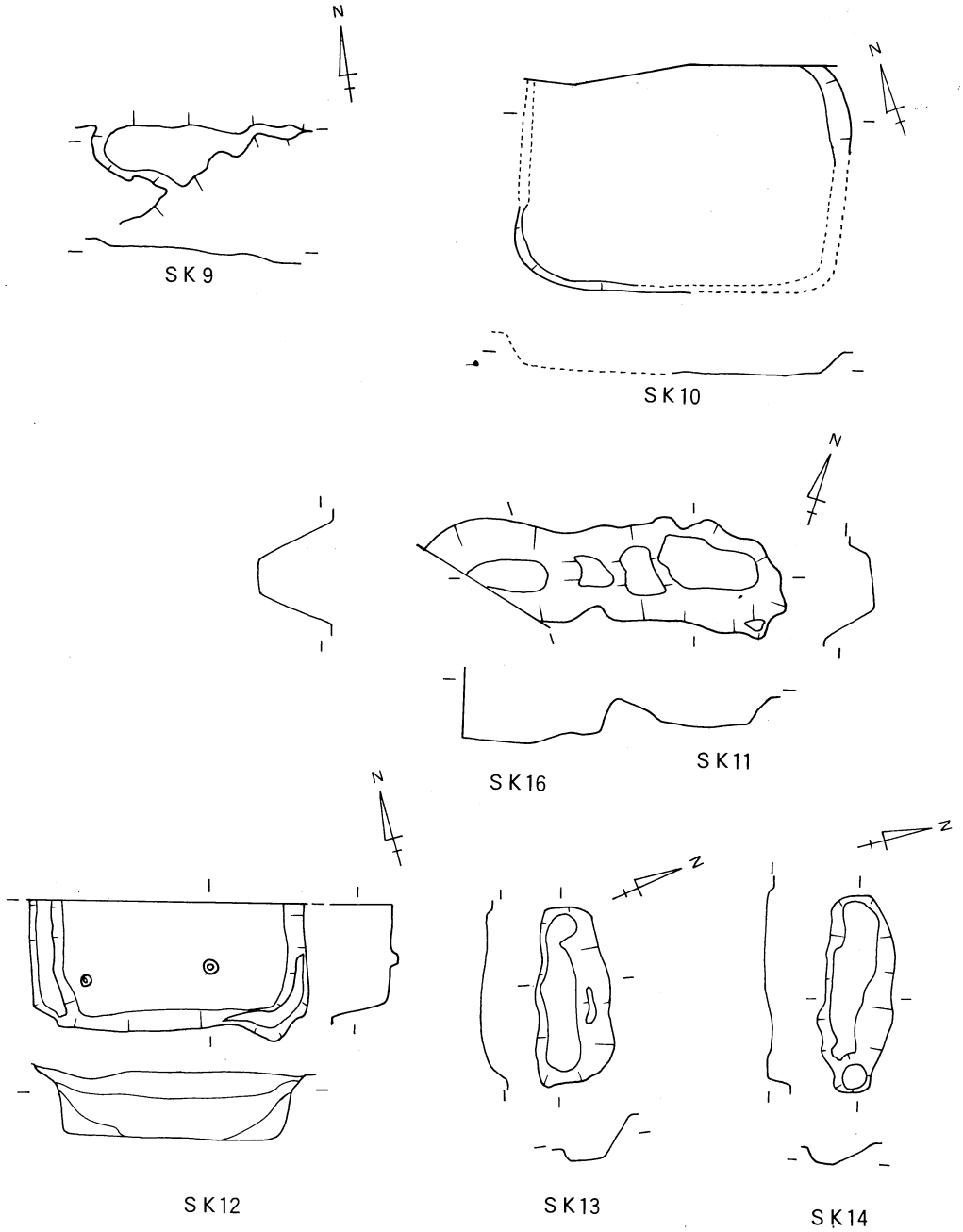


Fig 18 遺構図 SK9～14, SK16

ＳＫ15

平行四辺形のプランを呈し，長軸50cm，短軸36cm，深さ22cmを測る。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。出土遺物は見られない。

ＳＫ16

ＳＫ11と接している，楕円形のプランを有し，一部が調査区外に出ている。長軸推定 1.7m 短軸80cm，深さ40cmを測り，床面は一部段状に落ち込んでいる。埋土は黒褐色粘質土単純一層である。遺物は，壺底部（75），甕（74），蓋（73），鉢（76），高杯（77，78）の他弥生後期土器細片 160点が出土している。これらの細片のうち10点に叩きが認められる。ＳＫ16は，後期前半の時期である。

ＳＫ17

ＳＫ７に切られており規模，平面形を明らかにすることができないが，楕円形を呈し，長軸70～80cm，短軸50cm，深さ25cmの土壙であろう。埋土は黒褐色粘質土で，出土遺物は見られない。

ＳＫ18

隅丸長方形のプランを呈し，長軸65cm，短軸45cm，深さ20cmを測る。床は平坦面をなす。埋土は黒褐色粘質土で，出土遺物は見られない。

ＳＫ19

隅丸長方形のプランを呈し，長軸94cm，短軸68cm，深さ10cmを測る。ＳＫ14と切り合っているが先後関係は不明である。埋土は黒褐色粘質土で，出土遺物は見られない。

ＳＫ20

隅丸長方形のプランを呈し，長軸1.4m，短軸1.4m，深さ40cmを測る。床面は平坦であるが，一部段状に掘り込んでいる。ＳＤ１，ＳＫ10，ＳＫ21と切り合っている。断面観察から先後関係を明確に決定することはできないが，出土遺物等から，ＳＤ１，ＳＫ10，ＳＫ21よりも先行すると考えられるが，ＳＤ１との時期差は極めて短いと考えられる。埋土は黒褐色粘質土である。

遺物は，完形に近いものが多く出土している。壺（83，84，79，80），甕（81，85），蓋（82）等が出土している。図示したものは，ほとんど床面からの出土である。これらの他に，多量の炭化物が出土している。ＳＫ20は田村中期Ⅲ（古）の貯蔵穴である。

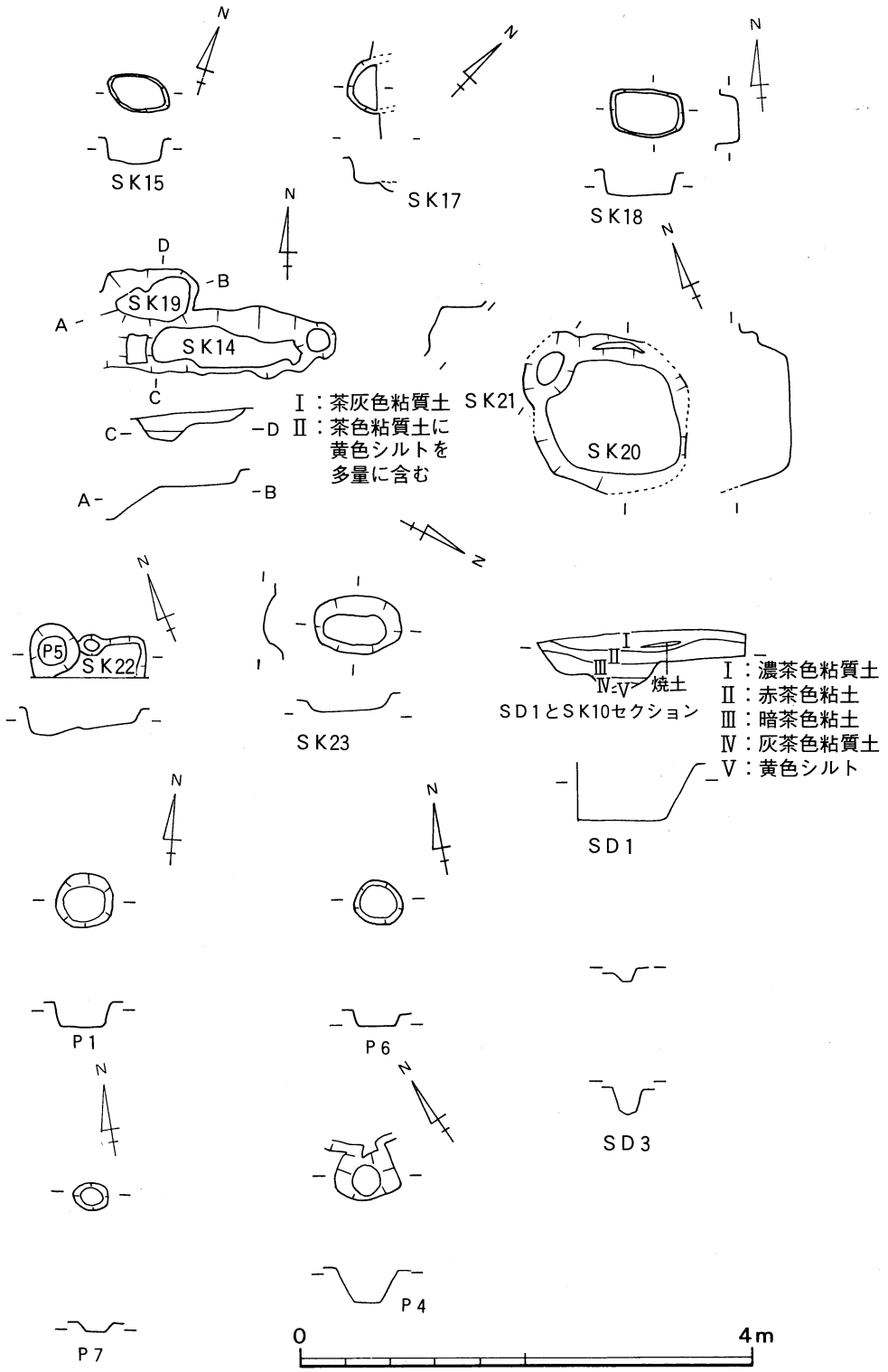


Fig 19 遺構図 SK15, 17～23, P1, P4, P6, P7, P5, SD1, SD3

ＳＫ21

楕円形を呈する小土壙で，ＳＫ20を切っている。長軸70cm，短軸40cm，深さ30cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は，壺（86，87，89），鉢（88）の他弥生土器細片20点が出土している。後期に属する。

ＳＫ22

Ｐ５に切られており，かつ大部分が調査区外に出ているため規模，プランを明らかにすることができない。深さは約10cmを測り，埋土は黒褐色粘質土である。弥生中・後期の細片が数点出土している。

ＳＫ23

楕円形のプランを呈し，長軸79cm，短軸50cm，深さ13cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で，弥生中期土器細片が数点出土している。

溝

ＳＤ１

調査区東部を斜めに切る溝で，確認延長16m，幅 1.1m，深さ55～50cmを測る。断面逆台形状を呈す。ＳＫ10，20と切り合っているが，ＳＫ10よりも古く，ＳＫ20より新しいと考えられるが，出土遺物からするとＳＫ20との時間差は小さい。埋土は，Ⅰ層：暗茶色粘質土，Ⅱ層：灰茶色粘質土，Ⅲ層：黄色シルトであり，Ⅲ層は壁の地山層が崩れ落ちたものである。遺物は，各層より多量に出土している。壺（91～101），甕（102～113），鉢（114），高杯（115～118）等であり，田村中期Ⅲの中でも新しい様相を示している。

ＳＤ２

調査区西部を縦に切る細い溝である。確認延長 1.8m，幅44cm，深さ10cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で，遺物は認められない。

PNo	径(cm)	深(cm)	出　土　遺　物
Ｐ１	48	22	弥生中期土器細片８点
Ｐ４	52	40	〃　４点
Ｐ６	44	20	〃　４点
Ｐ７	36	12	〃　１点

ピット一覧表

ピット

大小合わせて10数個検出できたが，遺物の見られたＰ１，Ｐ４，Ｐ６，Ｐ７については，ピット一覧表に示すとおりである。

4　遺物の考察

今次調査は，調査面積が狭隘であったにもかかわらず，比較的多くの出土遺物を得ることができた。中でも弥生中期土器は，遺構からの一括出土（ＳＫ８）などもあり，当地方の弥生中期土器を考える上で，重要な資料となる。したがって，ここでは，中期土器の分類を行い編年的位置付けを試みたい。また後期土器については，出土量こそ少ないが，新出の資料が見られるので，その紹介と位置付けを行いたい。

(1)　中期土器分類

壺形土器

分類の基準

①　全体のプロポーションによってＡ～Ｊ類に分ける。

②　口唇部の成形手法によって１～４に分類。すなわち，１．口唇部に強いナデ調整を施さない。２．口唇部に強いナデ調整を施し，凹状の口唇部を呈する。３．口唇部に凹線文を施す。また凹線文は，上下の拡張の有無によって細分が可能である。４．口唇部に沈線を施す。

③　口縁部外面の粘土帯貼付の有無によってａ・ｂに分類。ａは粘土帯を貼付するもの。ｂは粘土帯を貼付しないもの。

分類

Ａ類：比較的長い頸部から，口縁部がなめらかに大きく外反するタイプで，長い胴部を有するものが多い。Ａ１ａ，Ａ１ｂ，Ａ２ａ，Ａ２ｂ，Ａ３ｂ，Ａ４ａからなる。

Ｂ類：Ａ類と似ているが，Ａ類よりも頸部が短く，口縁部の外反も弱い。Ｂ２ａ，Ｂ３ｂからなる。

Ｃ類：直線的に立ち上る頸部から，口縁部が外反する。Ｃ１ｂ，Ｃ２ｂからなる。

Ｄ類：細頸壺

Ｅ類：口頸部が直線的に立ち上がる。

Ｆ類：頸部が直線的に立ち上がり，口縁部が強く外反する。

Ｇ類：器高の低いタイプで，口縁部が強く外反する。最大径が口径にあるものと，胴部にあるものとがある。

Ｈ類：器高の低いタイプで，口縁部がなめらかに大きく外反する。

Ｉ類：頸部が内傾して立ち上がり，口縁部は強く外反する。

Ｊ類：当地方に特有な，いわゆる薄手の土器である。(2)

表－1　中期壺形土器分類表

分　類	類　　例	分　類	類　　例
A 1 a	49, 51	C 1 b	90, 91
A 1 b	43, 44	D	95
A 2 a	40, 47, 48, 34, 57, 33	E 2 b	92, 80
A 2 b	32, 41, 42, 86	F 2 b	58, 87
A 3 b	3, 6	G 3 b	26, 94
A 4 a	46	H 2 b	45, 93
B 2 a	36, 50, 84, 83	I 2 b	96, 109
B 3 b	71	J	1

甕形土器

分類の基準

① 全体のプロポーションによってA類～C類に分ける。

② 口唇部の成形手法によって1～3に分類。すなわち，1．口唇部に横方向の強いナデを施さない。2．口唇部に横方向の強いナデ調整を施し，凹状の口唇部を呈する。3．口唇部に凹線文を施す。更に凹線文の形態によって4つに細分する。(a)端部を拡張しないもの。(b)端部を上方に拡張する。(c)端部を下方に拡張する。(d)端部を上・下に拡張する。

A類：口縁部が，頸部から丸味を帯びてなめらかに外反する。A1，A2，A3からなる。

B類：口縁部が，水平に近く屈曲する。B1，B3からなる。

C類：口縁部が，「く」字状に屈曲する。

表－2　中期甕形土器分類表

分　類	類　　例	分　類	類　　例
A 1	55	B 3 (b)	9, 56
A 2	102, 106, 113	C 2	105, 112
A 3 (a)	107	C 3 (a)	39, 108
B 1	31	C 3 (b)	103, 104, 110, 111
B 3 (a)	38	C 3 (d)	72　81

高杯形土器

A類：口縁部が直立し，外面に凹線文を施す。口唇部が面をなすA1類と凹状をなすA2類に分けることができる。前者は116を，後者は115, 117を該当させることができる。なお118の脚部は，A類に属する。

B類：外反する口縁部を有し，杯部は深い椀状を呈す。18が該当する。

C類：浅い椀状の杯部から，口縁部が直立し端部は尖り気味。70が該当する。

鉢形土器

分類の基準は，壺形土器と同じである。

A類：口縁部が，わずかに外反して立ち上がる。大型のもの。A2a　29

B類：口縁部が，わずかに外反して立ち上がる。小型のもの。B1b　114

C類：内湾気味に立ち上がる。C1b　61，88

(2) 中期土器編年

当地方における弥生中期土器は，岡本健児氏によって田村式→城式→北カリヤ式→龍河洞式の編年が試みられ，[3]『田村遺跡群』[4]の報告書では，田村中期Ⅰ→田村中期Ⅱ→田村中期Ⅲとされた。更に昭和59年に実施された進入灯田中地区[5]では，良好な一括資料を得ることができ，田村中期Ⅱを古と新に分け，中期土器を4段階に編年することができた。これは，岡本氏の編年を，より多くの資料をもとにして検証したことになった。今次調査で得た中期土器は，従来の編年を更に細分し，充実させることが可能な資料である。

中期土器編年を考える上で，検討に耐えうる資料が出土した遺構は，ＳＫ６，ＳＫ７，ＳＫ８，ＳＴ１（床面出土の土器），ＳＤ１であり，以下各遺構出土土器の特徴について検討していくこととする。ＳＫ６は表－１の分類表によると壺は口唇部に凹線文を有するG3bの他に，田村中期Ⅱの特徴である胴部に小突帯を貼付した25，26が出土している。甕（31）は，田村中期Ⅱ（古）に属するものである。鉢（29）は，口縁部に厚い粘土帯を貼付するタイプで，進入灯田中地区[6]のＳＫ12出土の201，202の系譜上に位置付けることができるものである。したがって，ＳＫ６出土の土器は，凹線文が見られることから進入灯田中地区のＳＫ12よりも後出で，田村遺跡群[7]LoC45地点のＳＤ２に先行する時期とすることができる。

ＳＫ７について見ると，壺はA2a類が３点（33，34，40），A2b類が１点（32），B2a類が１点（36）ある。これら５点のうち32以外は，すべて当地方の伝統的手法（a）を有するものである。しかしすべての口唇部は，横方向の強いナデ調整によって凹状を呈している。また36に見られる頸部下端の断面三角突帯は，「粘土紐をヨコナデによって断面三角形になるように貼り付けた」[8]ものであり，口縁部の形態は全く異なるが，百中Ⅱ新に比定できるものである。甕は38，39が出土している。共に口縁端部をわずかにつまみ上げ口唇部に２条の凹線を有するものである。また39の内面には縦方向のハケ調整が見られる。この時期の壺には，すでに凹線文が見られるのであるが，ＳＫ７が伝統的の手法の壺のみによって構成されているために，それが伺えないものと考えられる。

ＳＫ８は，壺が多量に出土している。分類表で見ると，口縁部の形態の明らかな壺11例

中Ａ類が９例（41～44，46～49，51），Ｂ類（50）とＨ類（45）が１例ずつ出土している。Ａ・Ｂ類の中で，口縁部をａ手法で形成するものが６例，口唇部の形態は①が４例，②が５例，④が１例である。口縁部，口唇部の形態は，田村中期Ⅱの特徴を示しているが，図示することができなかった土器には，後述するＳＴ１出土の甕（９）と同じものや，田村中期Ⅲの土器片が見られる。したがってＳＫ８は，凹線文が盛行する時期であるにもかかわらず，何らかの目的で伝統的な手法を駆使して製作された土器のみを集中して入れた貯蔵穴と考えられる。[9]したがって，資料が偏っているのであって，年代の違いを表わしているのではない。

ＳＫ20も完形あるいは，それに近い土器が出土している。壺は，Ａ類がなくＢ２ａ類が２例（83，84），Ｅ２ｂ類が１例（80），その他上胴部に櫛描波状文，頸部に凹線文[10]Ｂ種及び三角実帯を有する79が出土している。外面の調整は，79が波状文以下全面縦方向のヘラ磨き，85は上胴部がハケ調整後ヘラ磨き，中位がハケ調整のまま，下胴部が丁寧なヘラ磨きを施している。80は，後期に続くタイプであるが，この時期のものは凹線文が見られる。甕81は，外面下半ヘラ磨き，内面下部ヘラ削りで，口唇部は上下に拡張させる凹線文を施しており，田村中期Ⅲに属することを示している。

ＳＴ１出土の遺物は，床面出土のＡ３ｂ類壺（６），Ｂ３ｂ類甕（９），高杯はＢ類の18などを一括資料として検討することができる。壺（６）は，ＳＫ20の79と比較するといくつかの新しい様相を見ることができる。６は，内面ヘラ削りが内面中位にまで施されていること，頸部の凹線文Ｂ種はすでに見られなくなっている。外面の調整は79が全面ヘラ磨きがあるのに対して，６は下平のみである。またＳＫ20には，伝統的の手法を有する壺が出土しているのに対して，ＳＴ１には見られない。ＳＴ１は，ＳＫ20よりも後出であると考えなければならない。

ＳＤ１については，壺８例（90～96，109），甕11例（102～108，110～113），鉢１例（114），高杯４例（115～118）を挙げることができる。先述してきた遺構出土の土器組成は，壺が最も多かったのに対して，ＳＤ１では甕が多くなっている。すなわち後期において一般的に見られる壺の減少と甕の増加という現象がこの段階にすでに現われている。各器種個々について見ると，壺では伝統的なＡ・Ｂ類は全く見られず，後期に盛行する長頸の壺Ｃ類（90，91）やＥ類（92）がみられる。Ｅ類もＳＫ20では，ヨコ方向の強いナデ調整が目立ったが，92は口唇部をわずかにナデるにすぎない。

Ｈ２ｂ類は，ＳＫ８出土の45には内面ヘラ削りはなかったが，ＳＤ１の93は幅広く削っている。新出のものとしては，細頸壺（95）やＩ２ｂ類（96，109）を挙げることができる。95は，内面全面にヘラ削りを施し，外面上端部に凹線文をわずかにとどめている。96は櫛原体で頸部に山形文を描き，上下に直線文を描いている。共に当地方では極めて珍しい器形であるが，95は黒谷川遺跡[11]に比較的多く出土しており，今後両者の関係を追求していかなければならない。甕は，量が多くなるだけではなく種類も増している。Ａ２，Ａ３ａ，Ｃ２，

C３a，C３b類とバラエティーに富んでいる。凹線文を有するものは11例中５例に見られるが，口縁部はすべて「く」字状に屈曲している。108は，ＳＫ７の38,39と一見似ているが，明確な凹線ではなく，沈線文に近いものである。112は，頸部近くまで内面ヘラ削りが見られるが，他のものは113に見られるように，胴部下半までと考えられる。高杯はＡ類のみ４例（115～118）が出土している。117は，口唇部が凹状をなすものである。ＳＤ１の遺物は，田村中期Ⅲの中でも新しい時期に属するものである。

ＳＫ20からＳＤ１出土の土器は，従来田村中期Ⅲの中に包括されていたものであり，今次調査によって，その細分が可能となった。すなわち中期Ⅲを（古），（中），（新）に分け，ＳＫ20を田村中期Ⅲ（古），ＳＫ８・ＳＴ１を田村中期Ⅲ(中)，ＳＤ１を田村中期Ⅲ（新）と編年的に位置づけたい。またＳＫ６・ＳＫ７は，従来の田村中期Ⅱ（新）に比定することができる。

(2) 後期土器について

後期土器の良好な資料としては，ＳＴ１検出面の集中出土土器とＳＫ12床面出土の土器を挙げることができる。まず前者から見ると壺（４，５，７），甕（10～12，20，22），鉢（19）があり，壺（５）が見られることや，甕（12，20）の口唇部の形態から考えて進入灯田中地区のＳＴ１に比定できるが，叩きが見られないので若干古い要素を持っている。後期前半に位置付けることができよう。ＳＫ12出土土器は，壺（63，69），甕（62），鉢(68)を挙げることができる。63は，胴部が著しく発達した器高の低い壺で，胴部中位に２条のヘラ描沈線を施し，沈線間に２個１組の竹管文を有し，上胴部にはハケ状原体で３条の刺突文をめぐらしている。口縁部は強く外方に屈曲し拡張した口唇部には２条の凹線文を引き，更に２個１組の竹管文を施す。内面にはハケ調整が見られる。一見すると中期Ⅲのものと考えるが，共伴関係から否定せざるを得ない。69は，中期Ⅲから後期に見られるタイプであるが，厚手の作り，凹線文の欠如などから後期のものとしなければならない。62は「く」字状に外反する口縁部を有し，端部は丸くおさめるが，少しつまみ上げている。内面は頸部までヘラ削りが施されている。68は大型の鉢である。直立に立ち上った口縁部が端部で外反する。口唇部は，ヨコ方向のナデによりわずかに外反する面をなす。このような土器のセット関係は，当地方において前例のないものであり，時期比定が難しいが，叩きが全く見られないことから後期中葉以前と考えられる。また63は，中国山地の後期中葉に見られるタイプということから，現時点においては，後期中葉頃としておきたい。

この他に後期土器で注目すべきものは，ＳＫ16から出土した高杯脚（77）を挙げることができる。このタイプの脚は，備前地方における上東式古４期[12]に出現するものであり，共伴している甕（74），脚（78）も後期中葉に比定できるものである。

田村中期Ⅱ～Ⅲの時期は，山陽地方と極めて密接な関係があったことが土器を通して伺えるが，後期になると急速にその影響が見られなくなる。77の出土は，現状におけるその

下限を示すものと言えよう。

5　遺構の考察

ＳＫ６，ＳＫ７，ＳＫ８，ＳＫ20，ＳＴ１，ＳＤ１出土土器を中心に編年的分析を行ったがこれによって各遺構の先後関係を明らかにすることができる。すなわち，古い方から，ＳＫ６・ＳＫ７→ＳＫ20→ＳＫ８・ＳＴ１→ＳＤ１へと変遷している。

今次調査区周辺は，田村遺跡群LoC45及び進入灯田中地区の調査によって，中期Ⅱ・Ⅲ期・後期の竪穴住居，中期Ⅲの土壙墓群が検出されている。中でも進入灯田中地区で確認した13基の壺棺，土壙墓は，Ａ～Ｄの４群から構成されていることが明らかとなっている。今次調査においても，溝状のプランを有する土壙墓と考えられるものが５基（ＳＫ５～７，13，14）確認できた。このうちＳＫ５（Ｎ－78°－Ｗ），ＳＫ13・14（Ｎ－70°－Ｗ）は，前回の田地区で確認したＳＫ３（Ｎ－78°－Ｗ），ＳＫ４（Ｎ－69°－Ｗ）と長軸方向がほぼ一致している。

ＳＴ１は，田村遺跡群Loc45で確認したＳＴ５～７，９，10と同時期のものである。

第二回の調査と今次調査によって，未通し地区を含む田中地区は，中期Ⅱ（古）～後期に至る住居址，貯蔵穴などの集落関係遺構と墓壙とからなっている遺跡である。住居址は，中期Ⅱ（古）～後期末まで継続しているが，墓壙は，中期Ⅱ（新）から中期Ⅲまでである。

住居址・土壙一覧表

遺構No	長さ(cm)	幅　cm	深さcm	種　類	時　期
ＳＴ１	径 526	134	26	住　居	中期Ⅲ(中)
ＳＫ１	128	134	20	不　明	不　明
ＳＫ２	172	84	24	〃	〃
ＳＫ３	不　明	80	不　明	〃	〃
ＳＫ４	76	48	20	〃	中期Ⅱ(古)
ＳＫ５	212	50	20	墓壙か	中　期
ＳＫ６	152	36	16	〃	中期Ⅱ(新)
ＳＫ７	不　明	62	20	〃	〃
ＳＫ８	〃	92	34	貯蔵穴	中期Ⅲ(中)
ＳＫ９	〃	不　明	8	不　明	後　期
ＳＫ10	280	192	20	〃	中期Ⅲ
ＳＫ11	268	88	32	〃	〃
ＳＫ12	230	不　明	56	貯蔵穴	後期中葉
ＳＫ13	150	64	40	墓壙か	中　期
ＳＫ14	166	64	21	〃	中期Ⅲ
ＳＫ15	50	36	22	不　明	不　明
ＳＫ16	170	80	40	〃	後期中葉
ＳＫ17	70～80	50	25	〃	不　明
ＳＫ18	65	45	20	〃	〃
ＳＫ19	94	68	10	〃	〃
ＳＫ20	140	140	40	貯蔵穴	中期Ⅲ(古)
ＳＫ21	70	40	30	不　明	後　期
ＳＫ22	不　明	不　明	10	〃	不　明
ＳＫ23	79	50	13	〃	中　期

註 (1) 高橋護氏の御教示による。

(2) 岡本健児 「第三章弥生時代」『高知県史・考古編』高知県 1968年

(3) (2)に同じ

(4) 高知県教育委員会 『高知空港拡張整備事業に伴う田村遺跡群発掘調査報告書』1986年

(5) 〃 『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（山側進入灯設置区域）報告書』1986年

(6) (5)に同じ

(7) (4)に同じ。第Ⅴ分冊Loc45

(8) 平井泰男 「弥生時代中期の土器」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第51集』岡山県文化財保護協会 1982年

(9) (5)の分析によると，中期Ⅲの段階では⑧手法の占める割合はそれほど大きく変化しないが，口唇部が凹状を呈するものは，60%以上を占めるようになる。

(10) 小林行雄 佐原 真 『紫雲出』香川県文化財保護委員会 1964年

(11) 菅原康夫 『黒谷川郡頭遺跡』Ⅰ 徳島県教育委員会 1986年

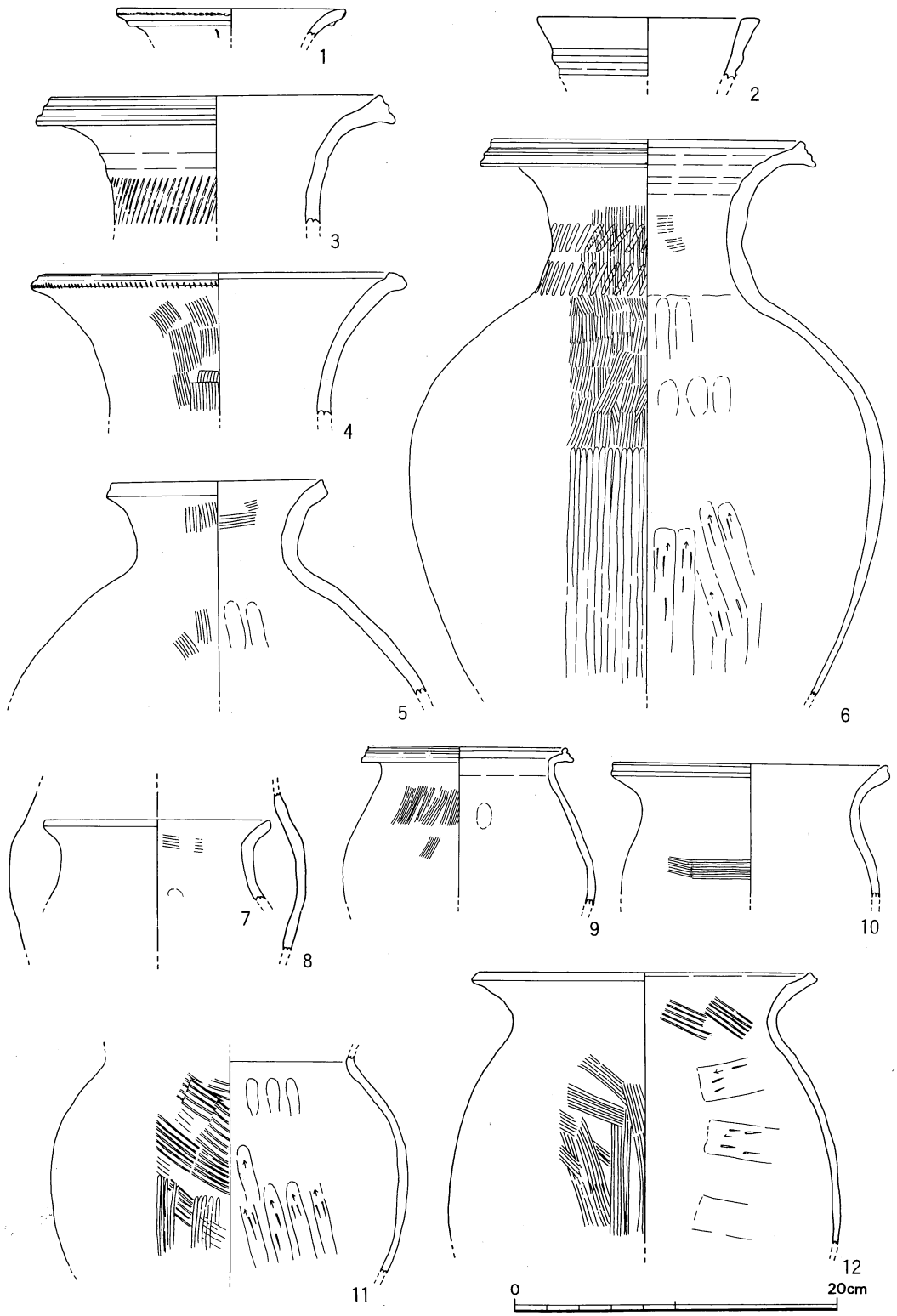


Fig 20　ＳＴ１出土土器

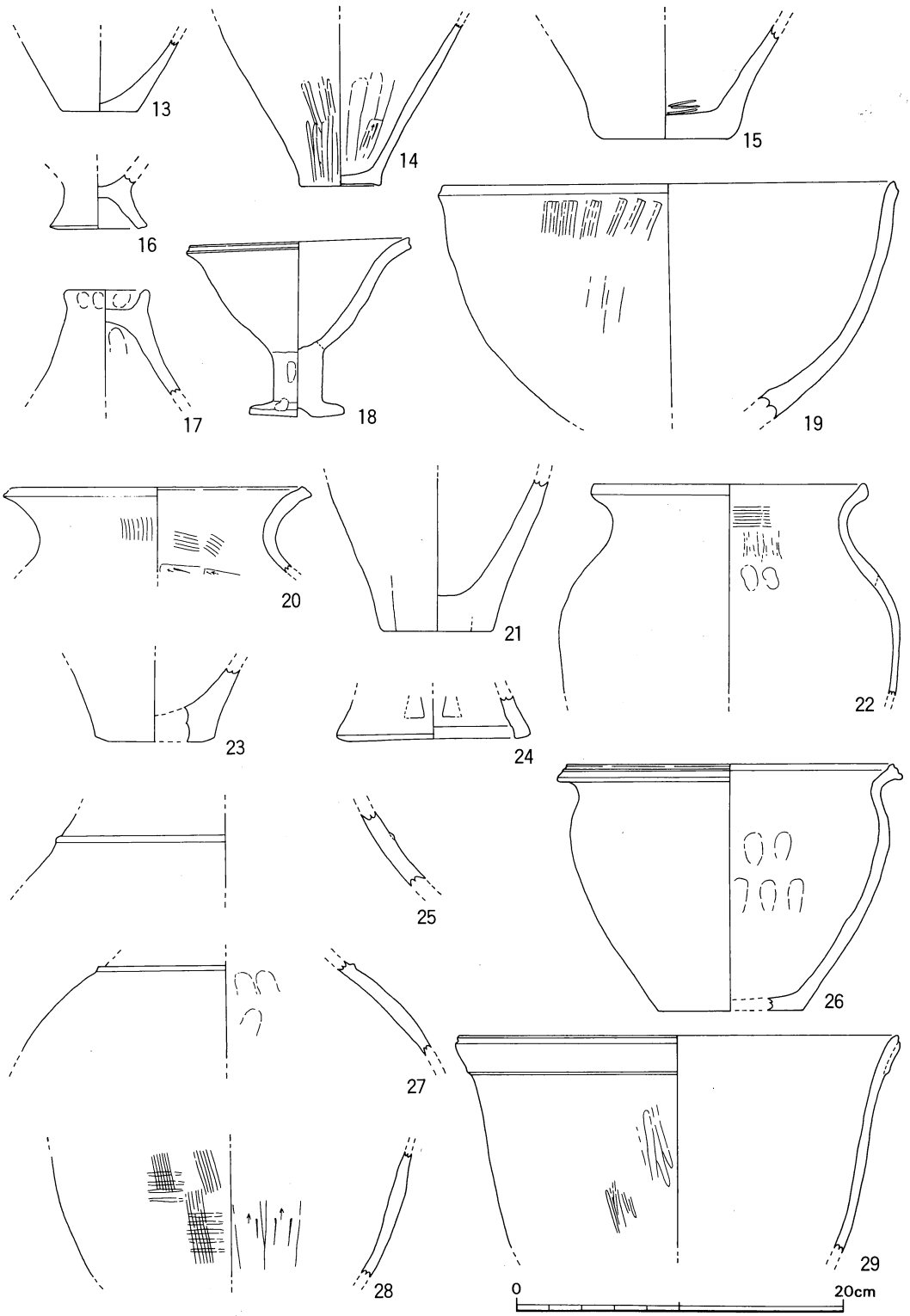


Fig 21 ST1．SK3，4，5，6出土土器

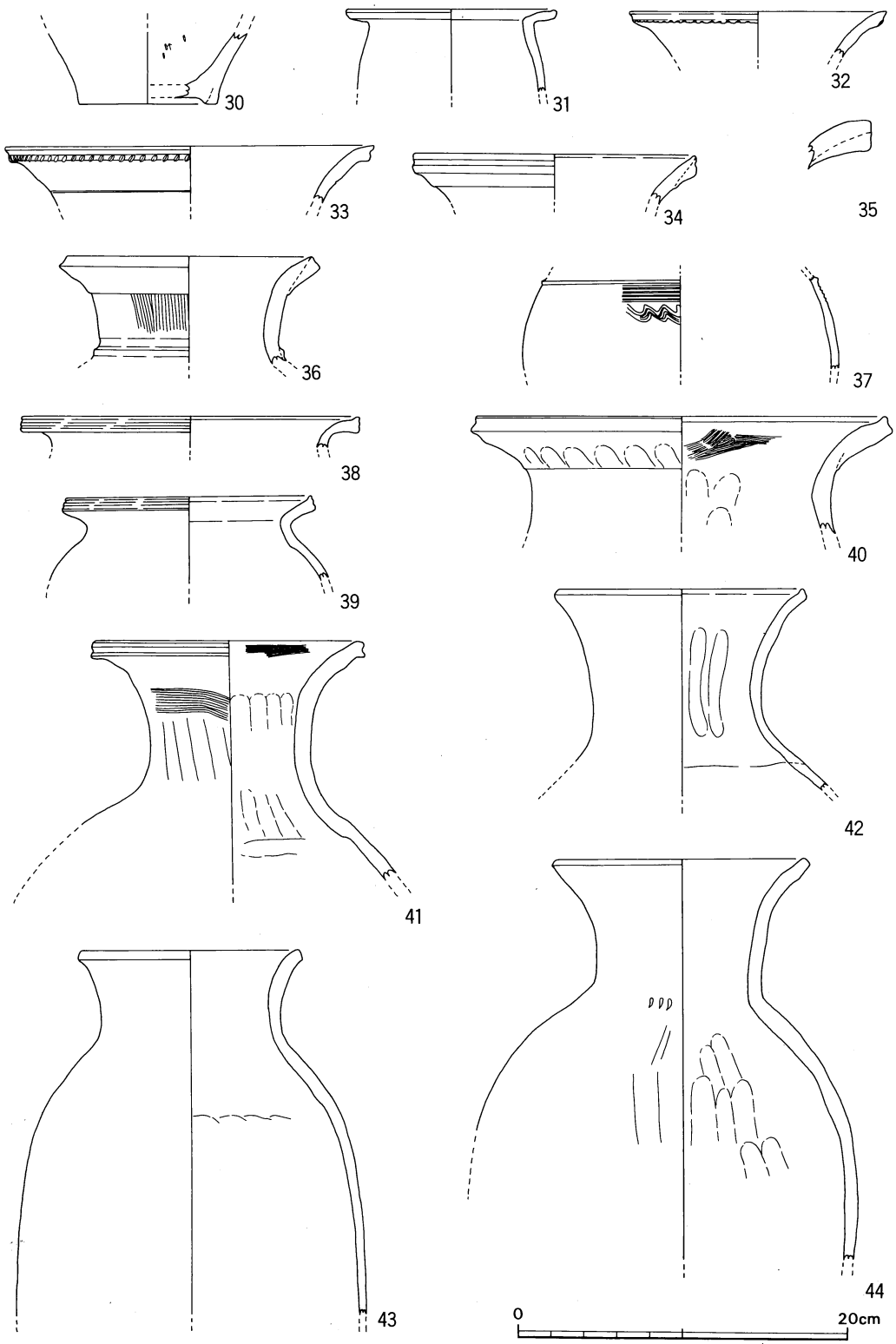


Fig 22 ＳＫ６，７，８出土土器

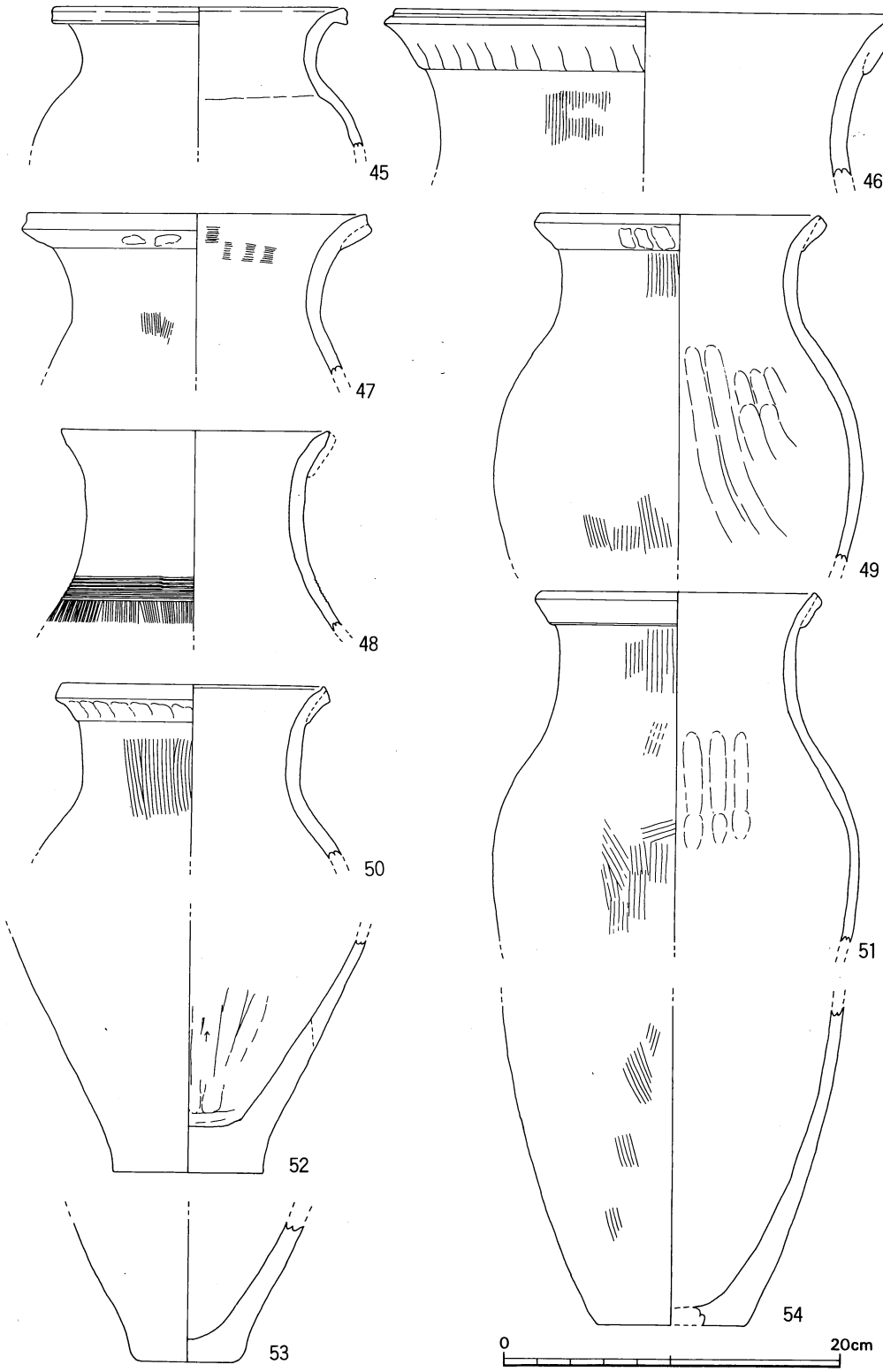


Fig 23　SK 8 出土土器

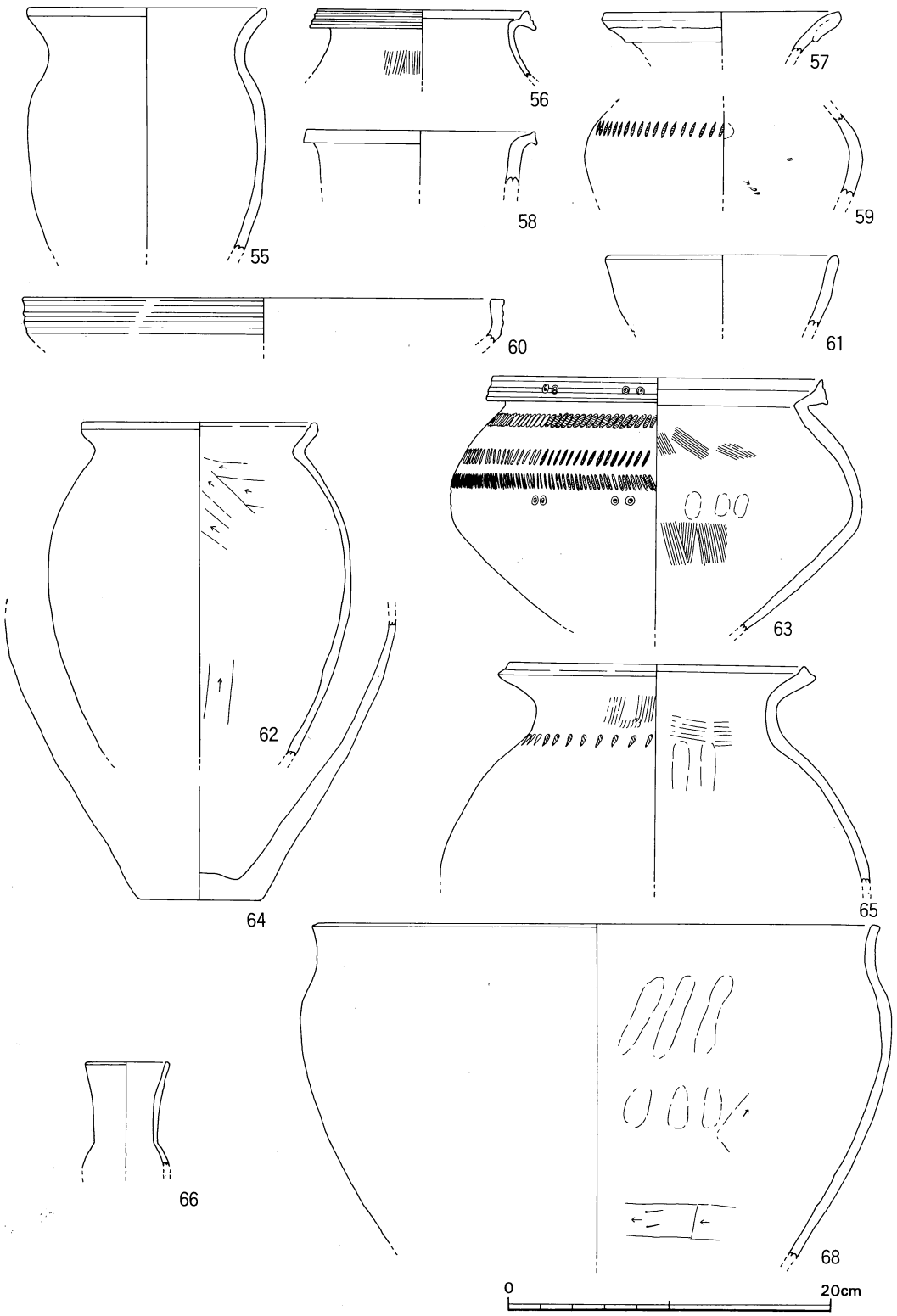


Fig 24 SK8, 9, 10, 11, 12出土土器

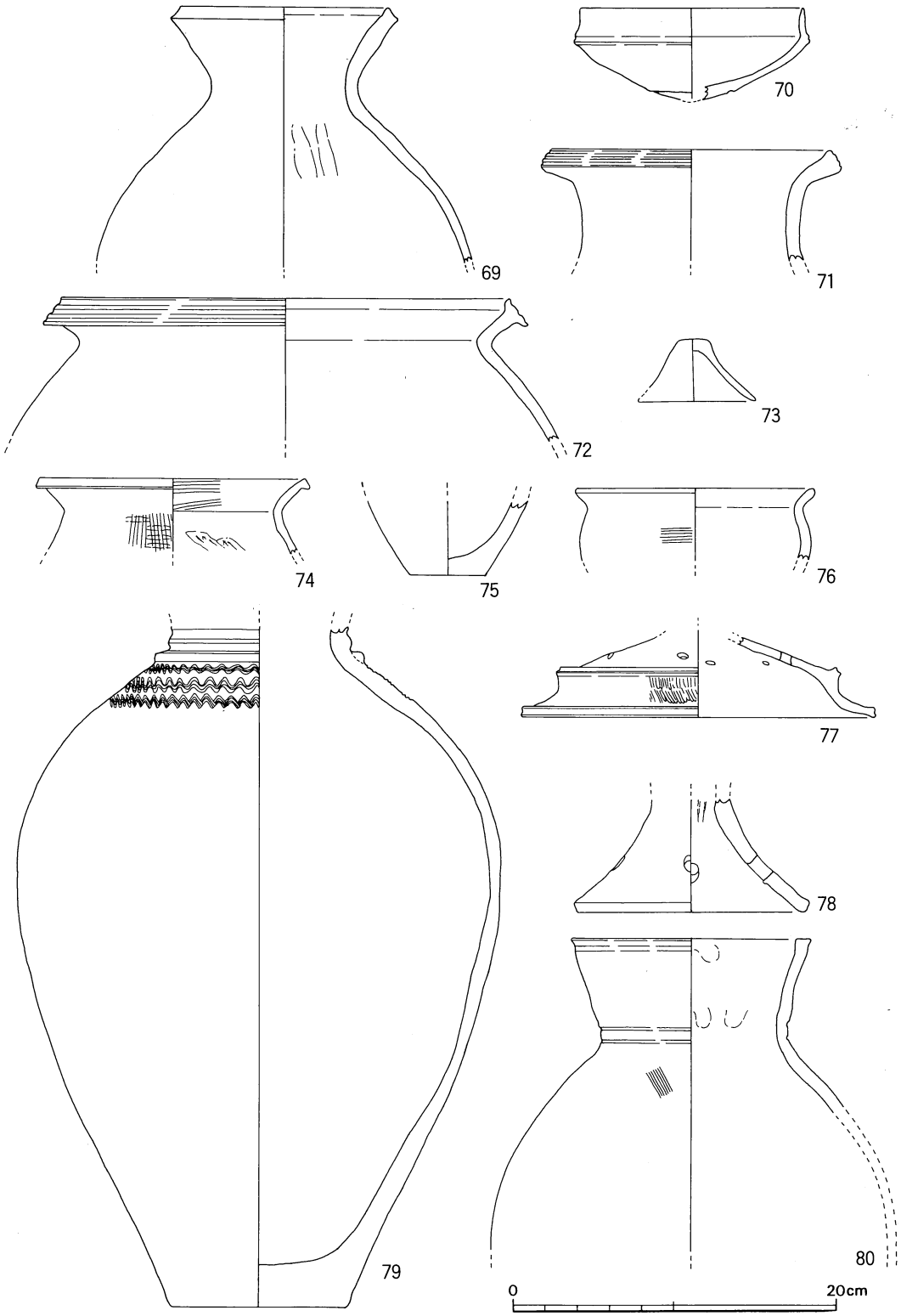


Fig 25 SK12, 13, 14, 16, 20出土土器

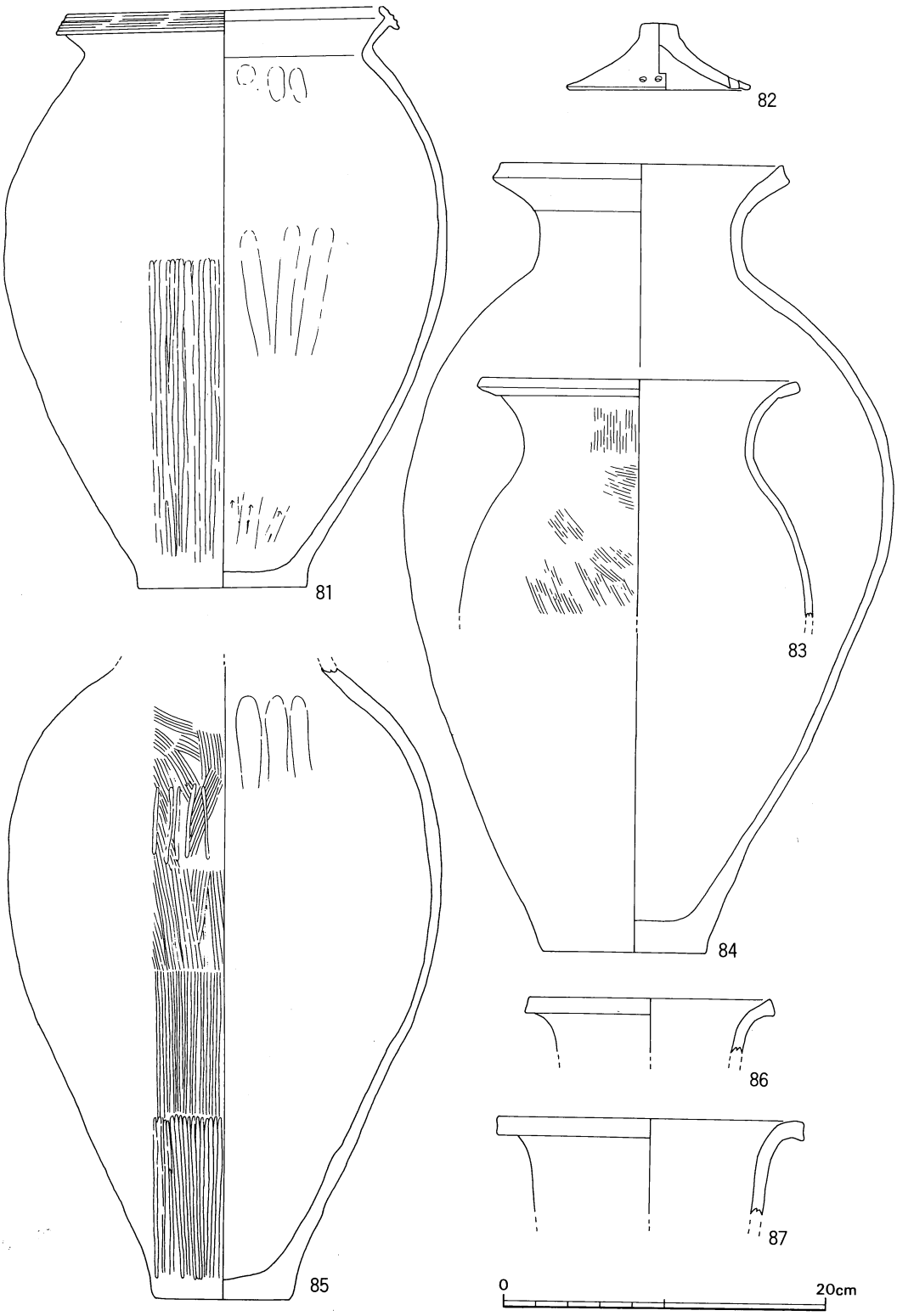


Fig 26 SK20, 21出土土器

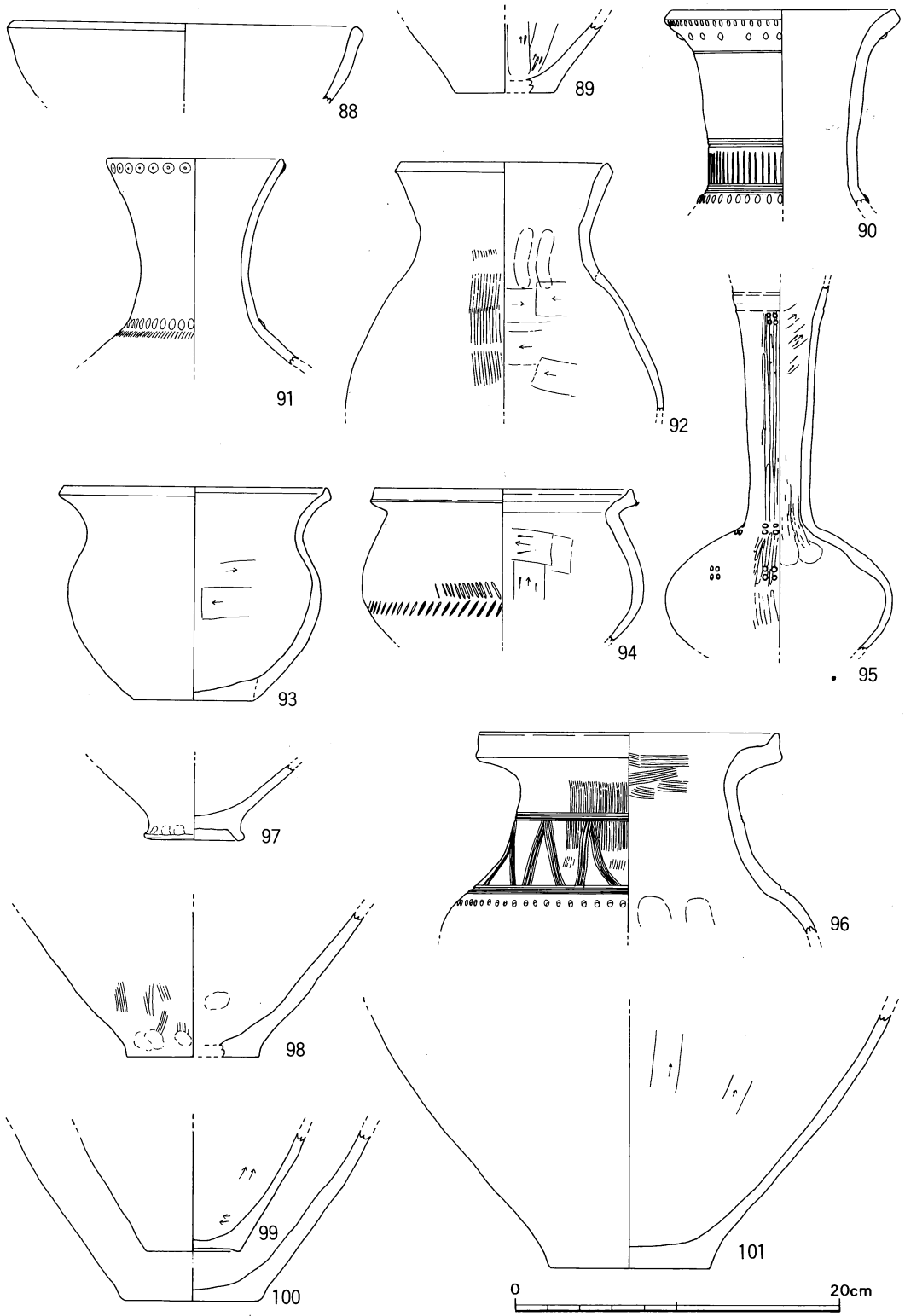


Fig 27 SK21, SD1 出土土器

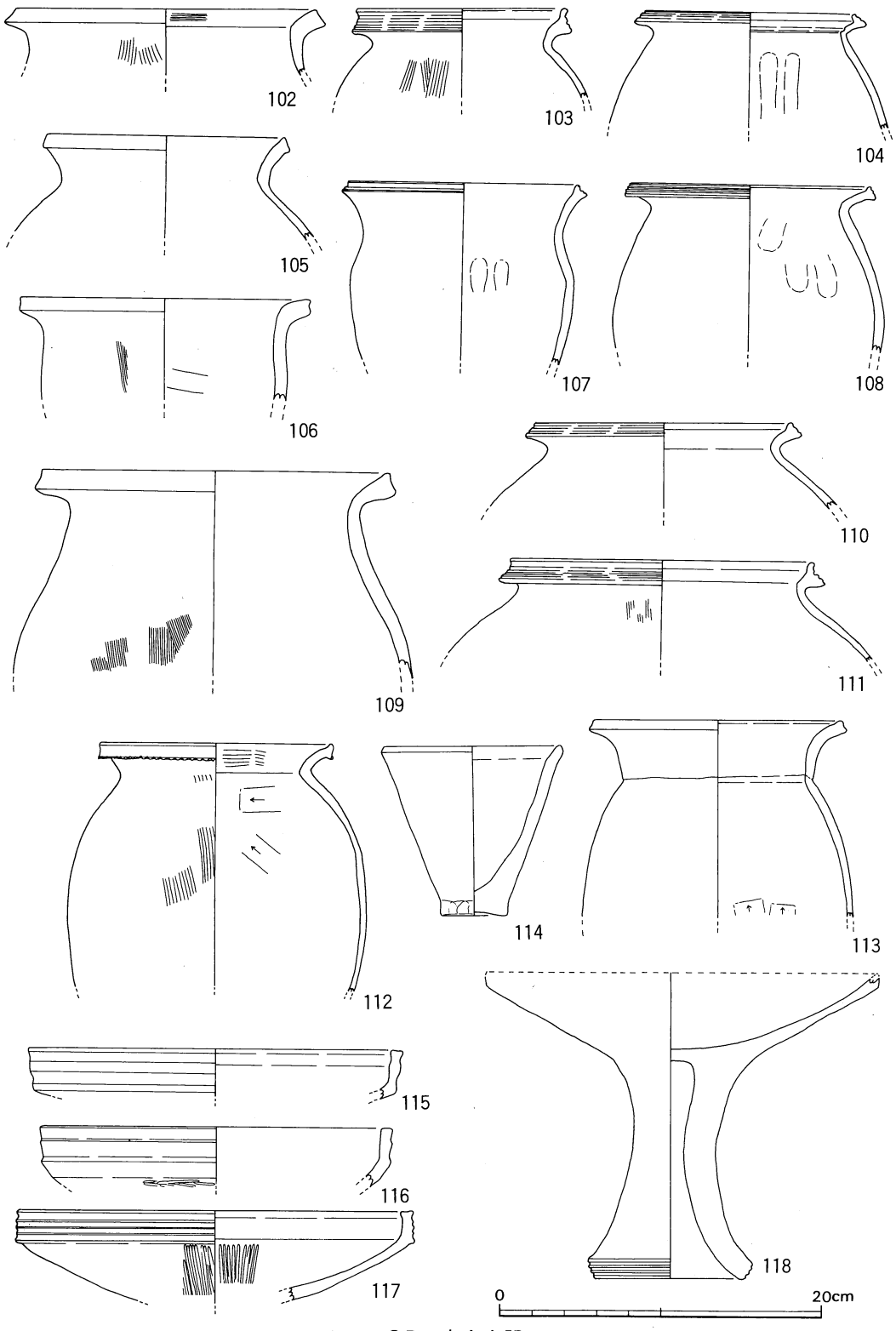


Fig 28　SD1出土土器

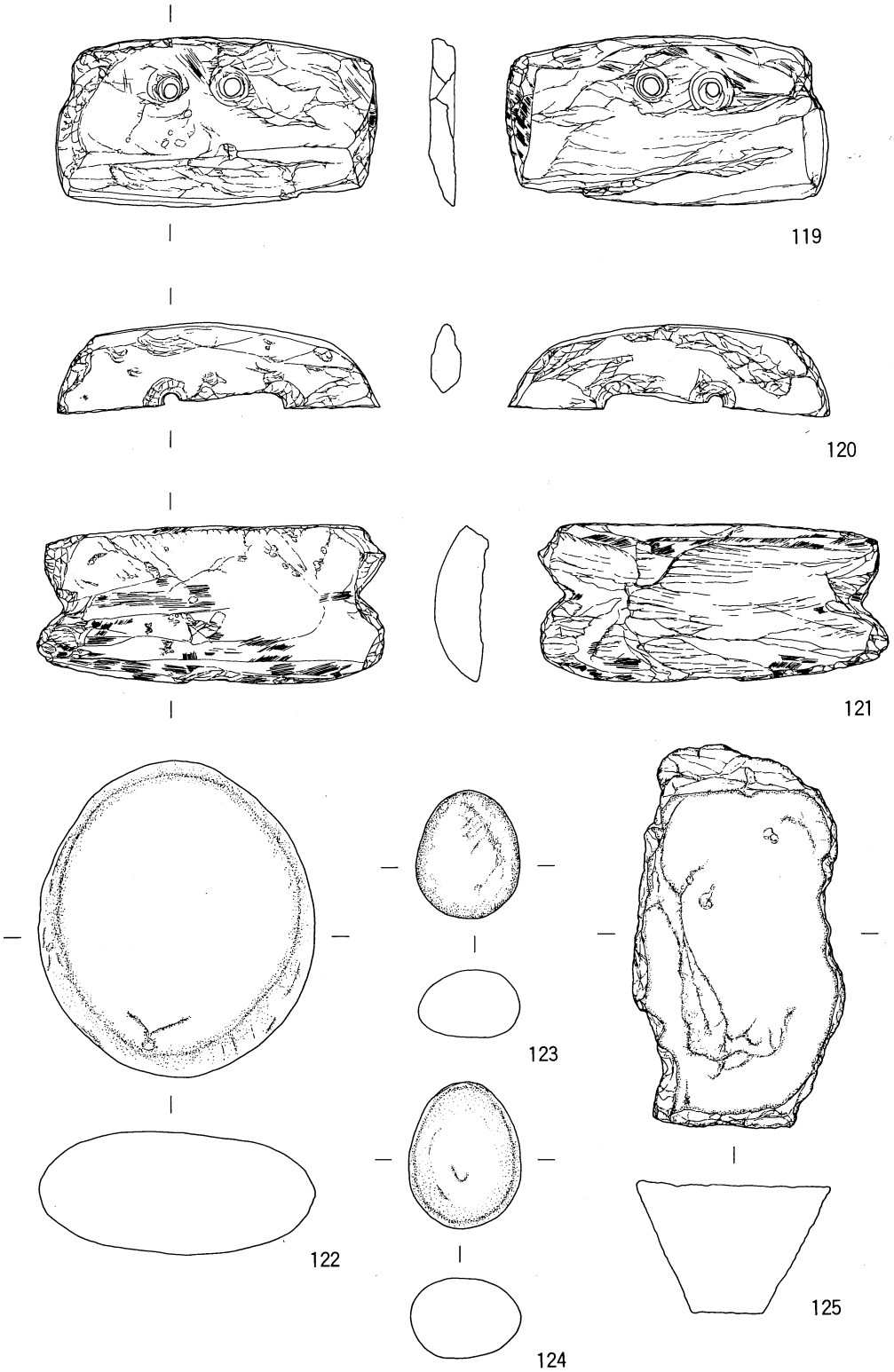
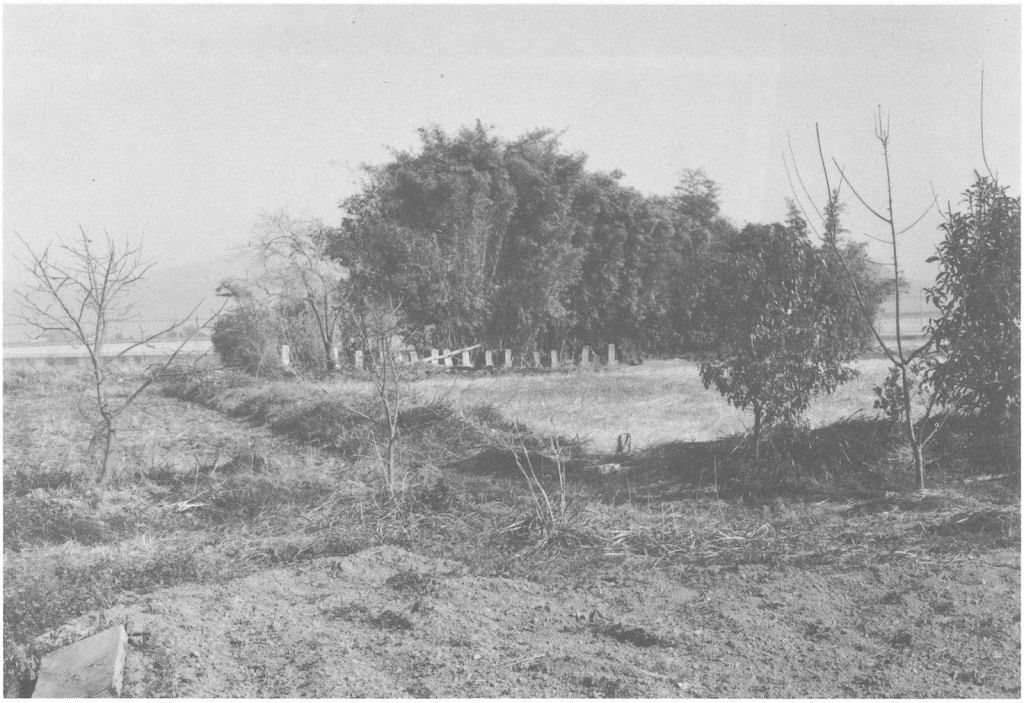


Fig 29 ＳＴ１出土石包丁(119,121)，磨石(122～124)，
砥石(125)，ＳＫ７出土石包丁(120)

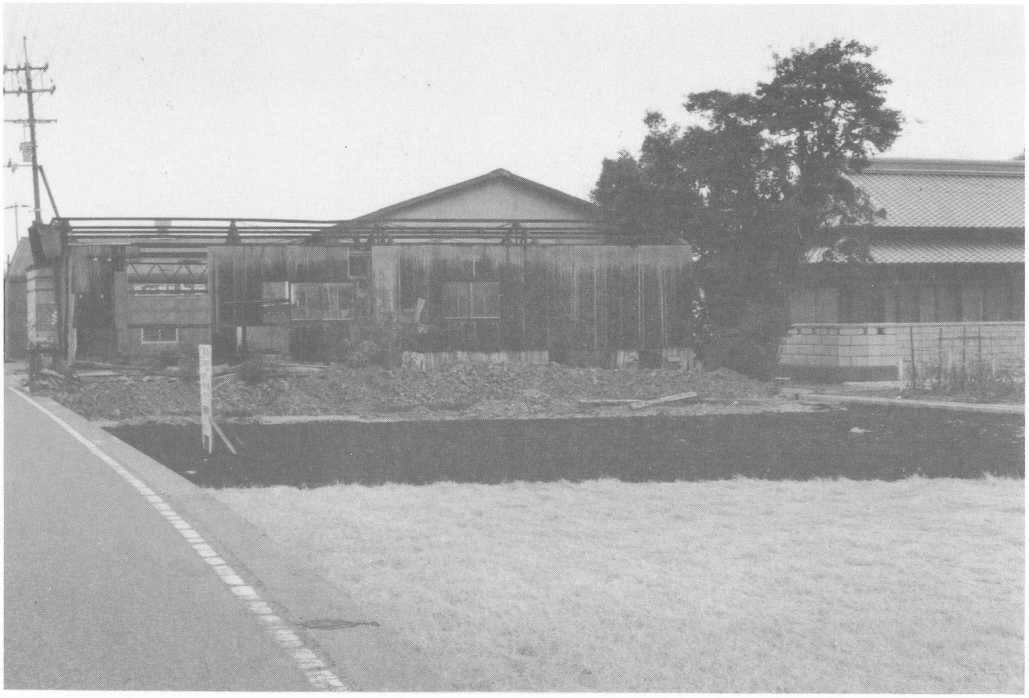
図　　版



調査対象地近景（東から）



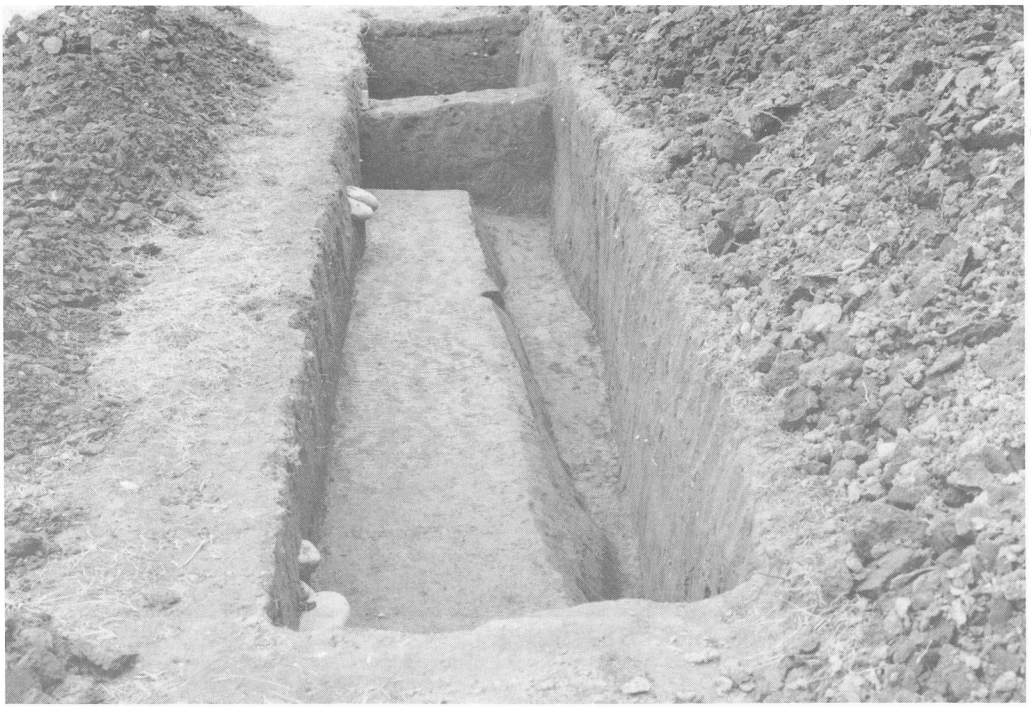
土塁状地形近景（南から）
前浜（三ノ戸）地区近景



徳升地区　ＴＲ1～3近景（北から）



徳升地区　ＴＲ2東壁



（西から）

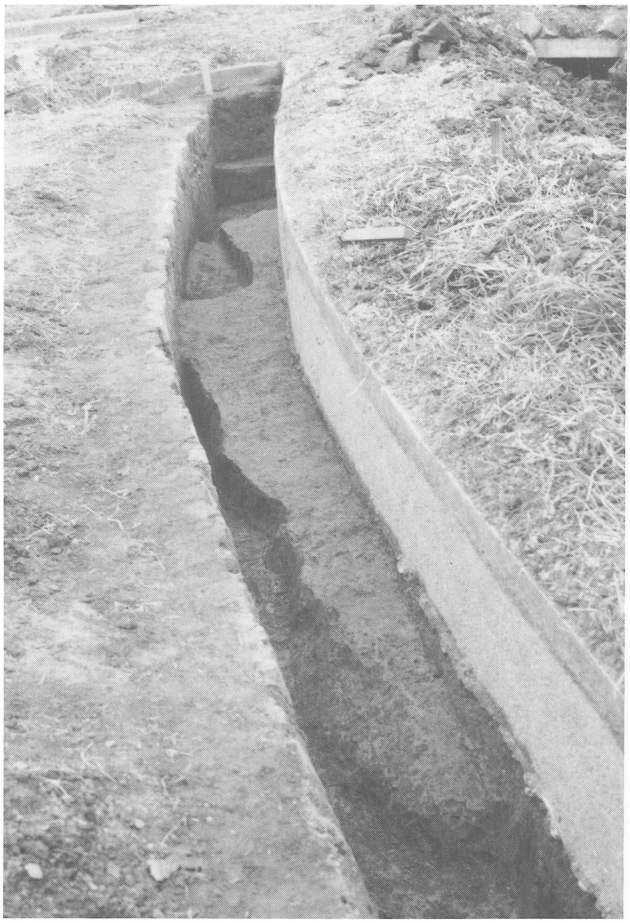


（南西から）

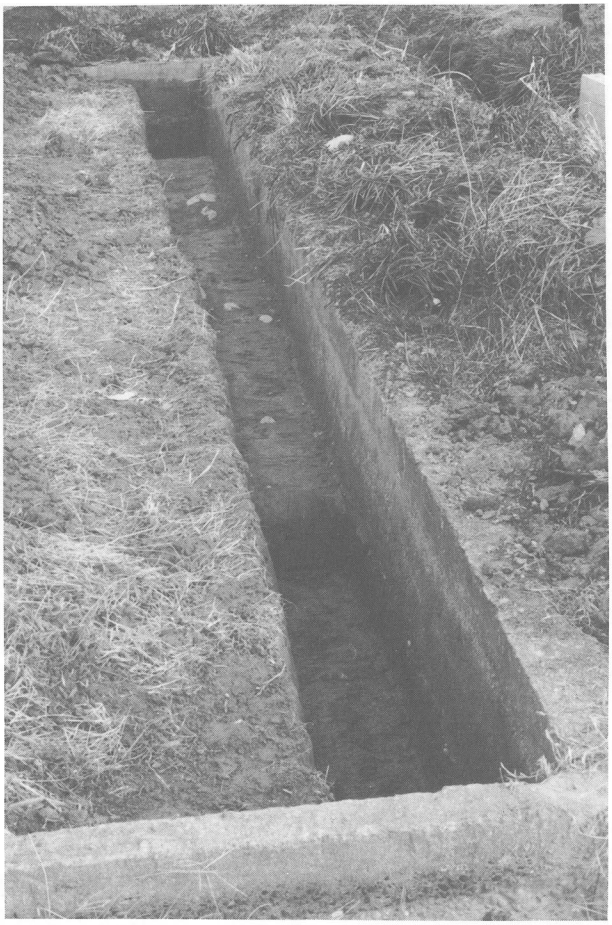
徳升地区　溝２検出状態



TR5設定状況（北西から）



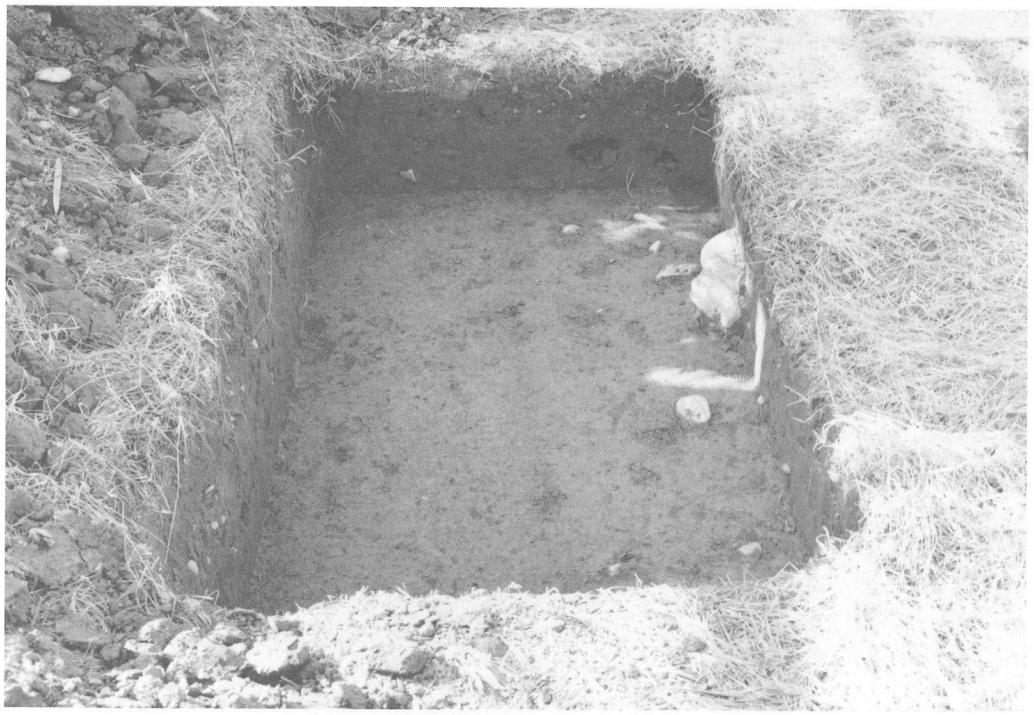
TR5完掘状態（西から）
徳升地区　TR4



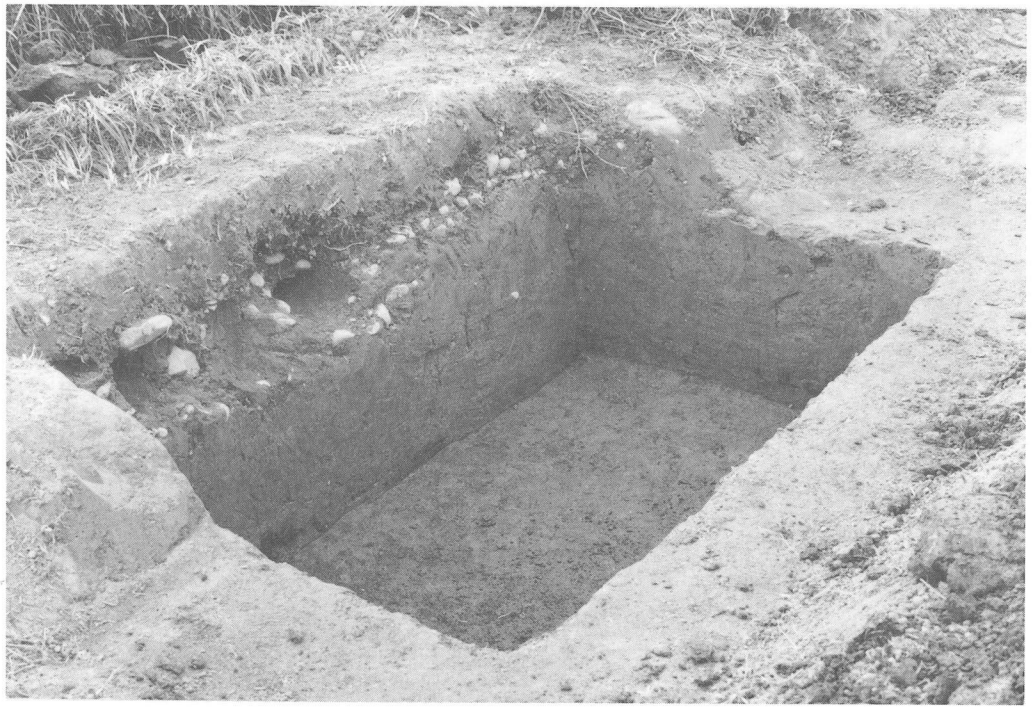
徳升地区　TR5（西から）



正善地区　トレンチ設定状況（西から）

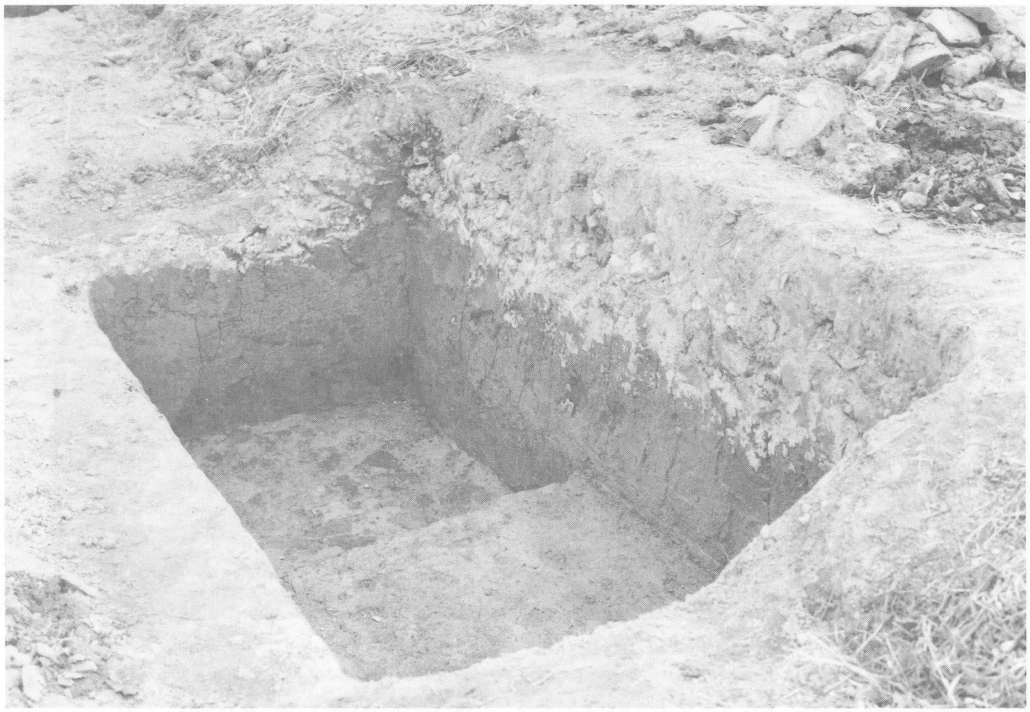


TR1（東から）

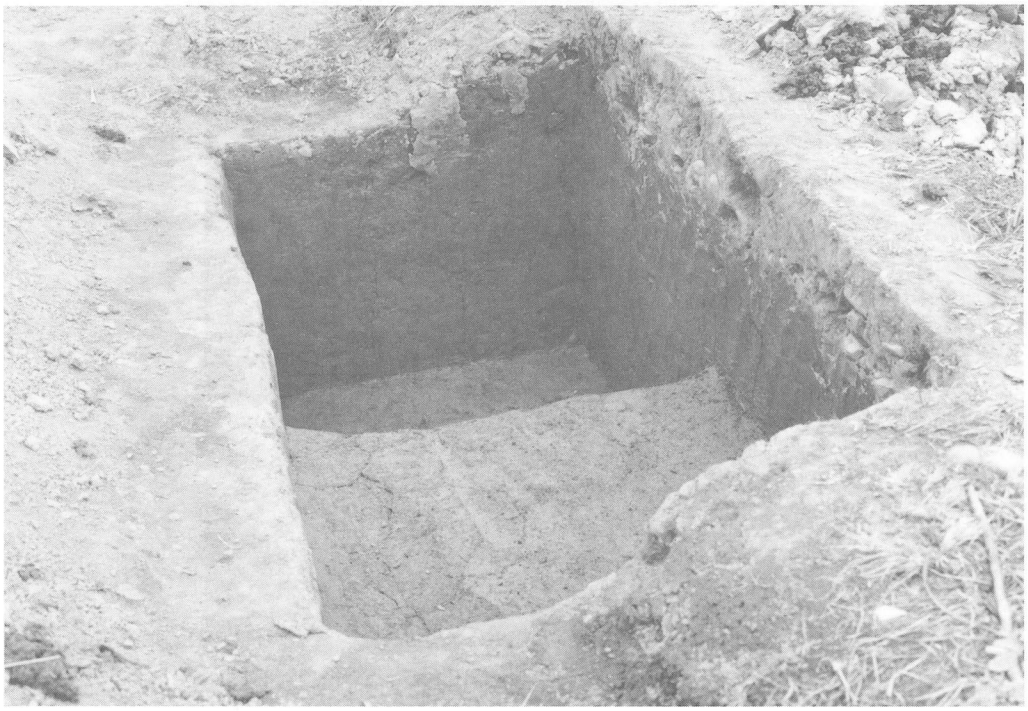


TR2（北東から）

徳升地区　TR1・2



TR4（西から）



TR5（西から）

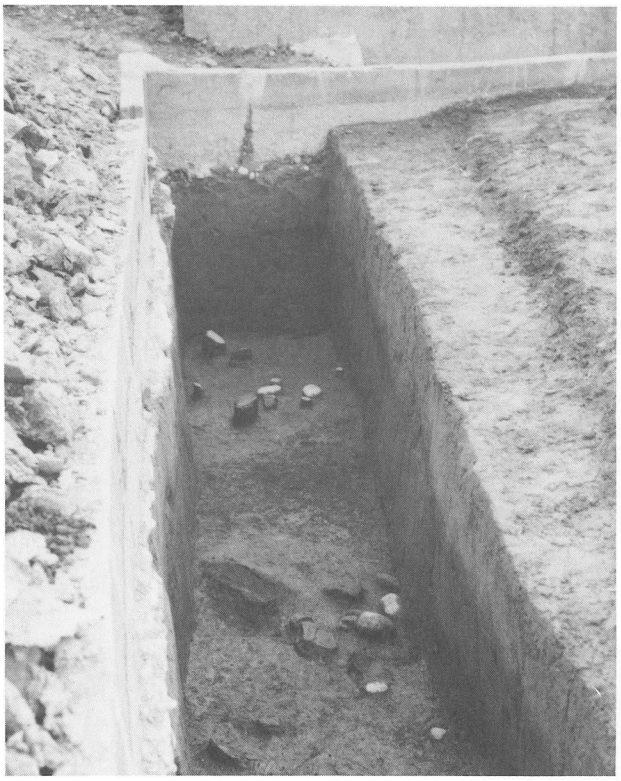
徳升地区　TR4・5



TR6～8　遠景（南から）



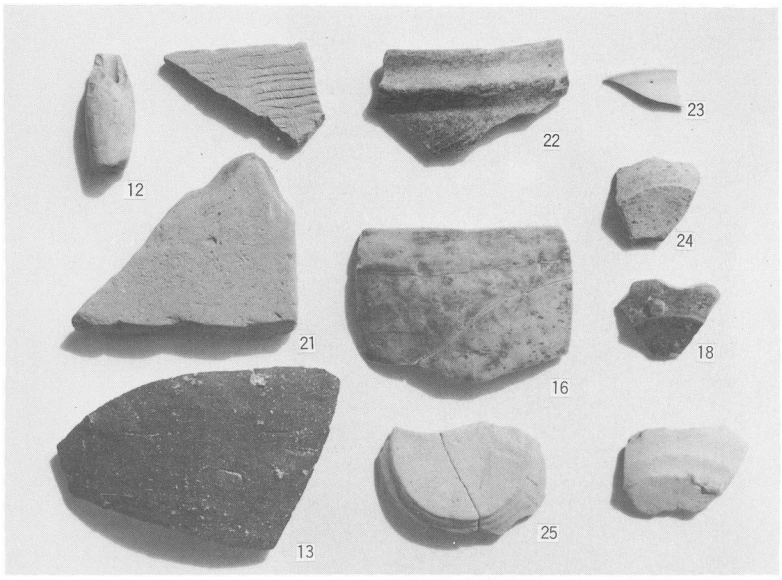
TR6・7ピット検出状態
正　善　地　区



竪穴住居址　遺物出土状態（西から）



竪穴住居址完掘状態（西から）





德升，正善地区出土遺物



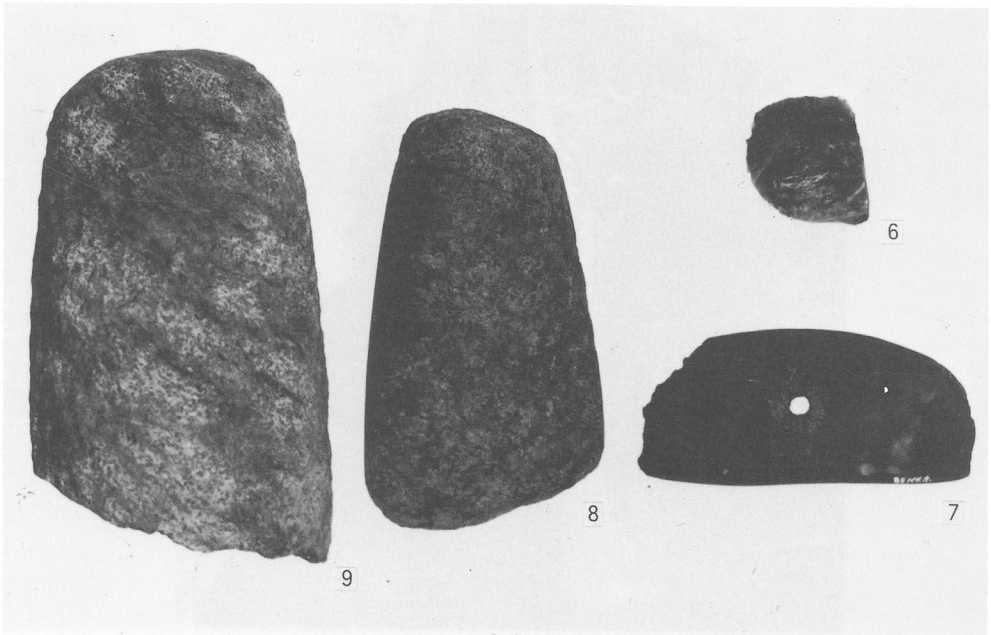
西見当地区調査前全景



西見当地区調査区



SK2，P_1．包含層出土土器



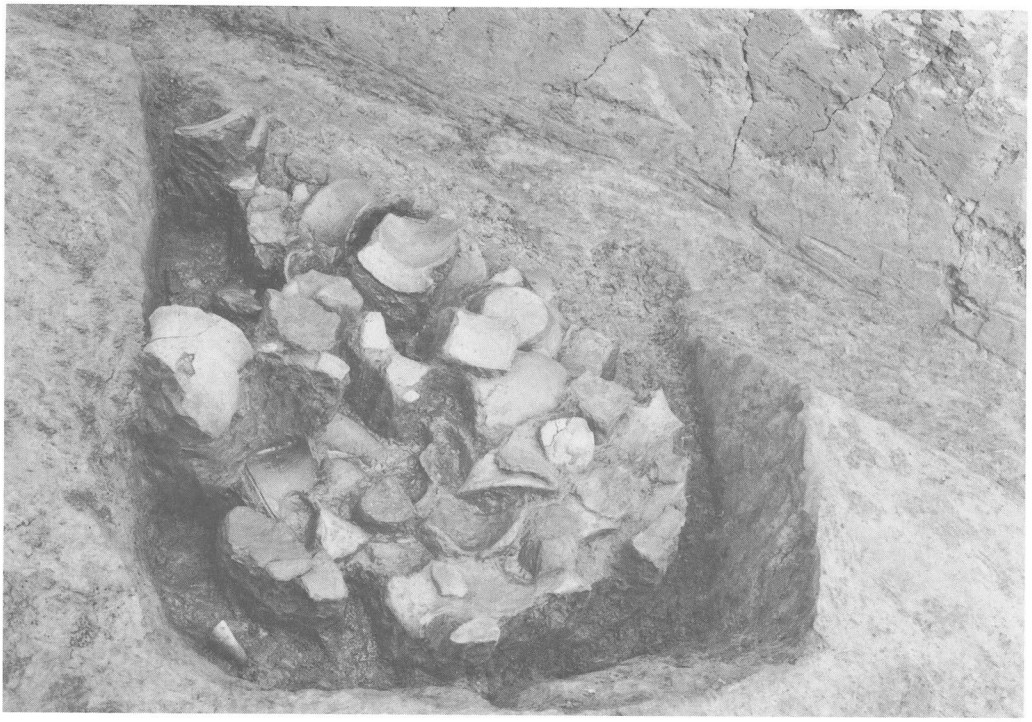
包含層出土石器



ST1 Ⅰ層土器出土状況



ST1完掘状況



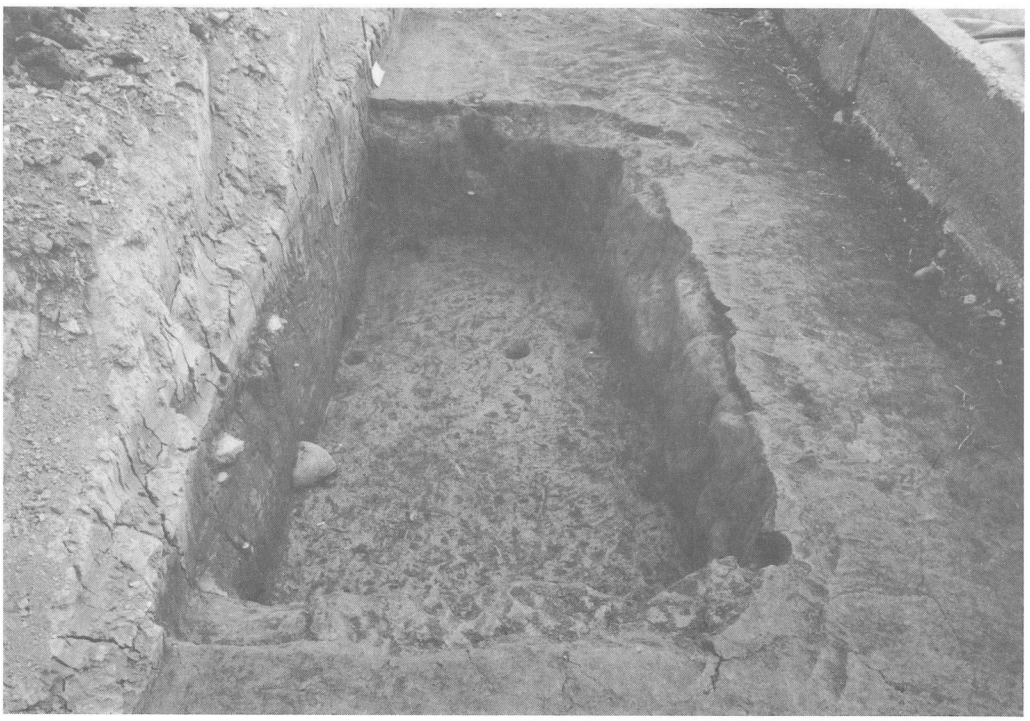
SK8土器出土状況



SK5完掘状況



SK12遺物出土状況



SK12完掘状況



SK20土器出土状況



SD1遺物出土状況



SD1，SK11セクション



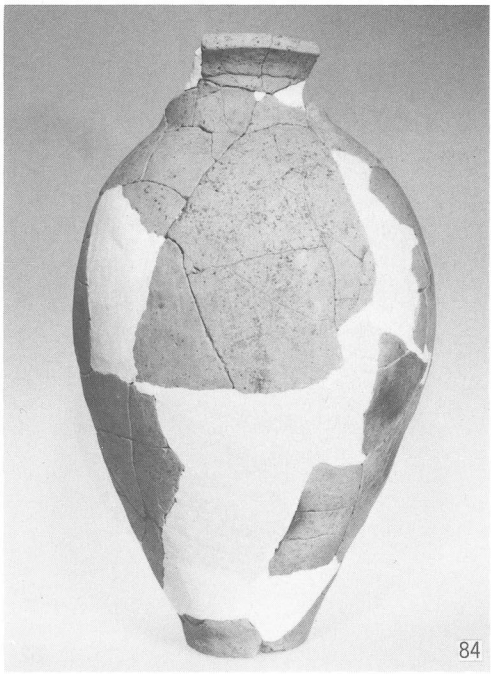
SD1遺物出土状況

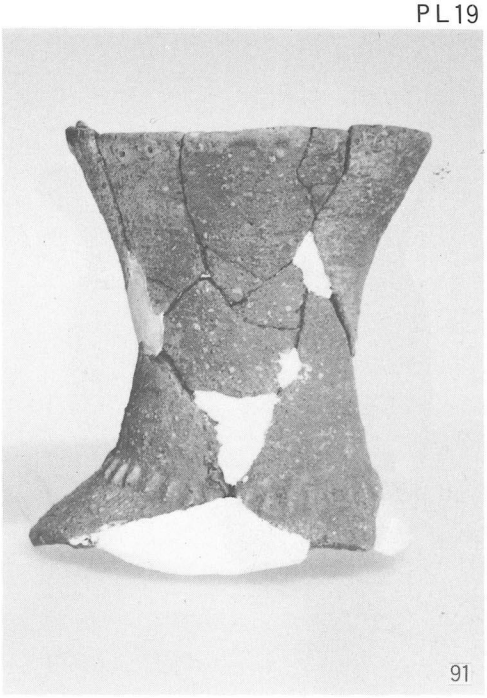


SD1，SK11完掘状況



調査区完掘状況（東から）





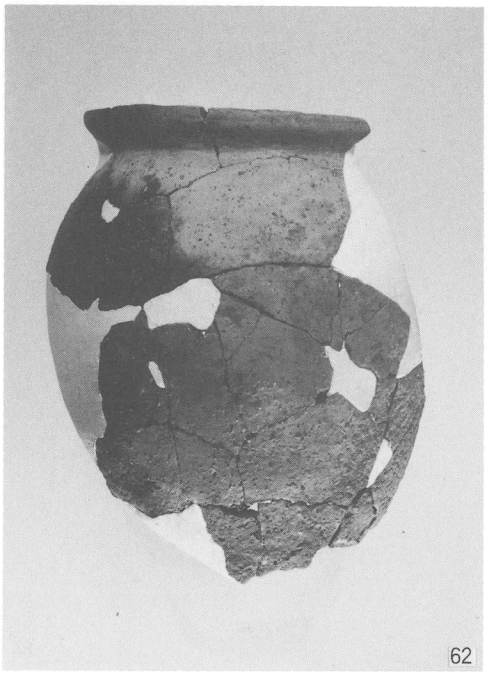




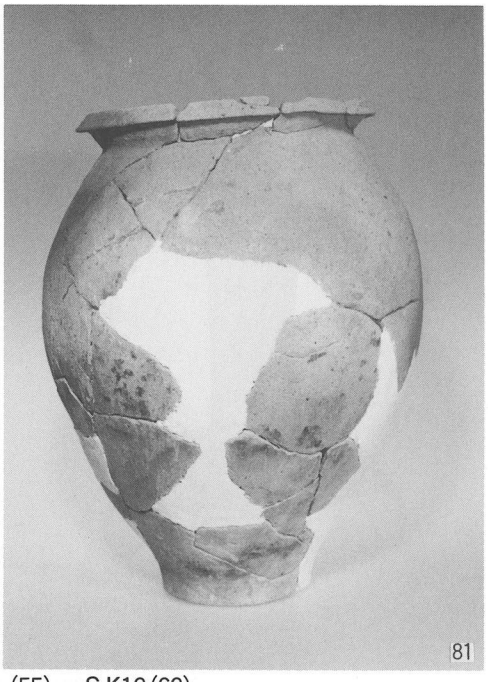
SK20(84)　SD1 (91・95・114)

PL 20

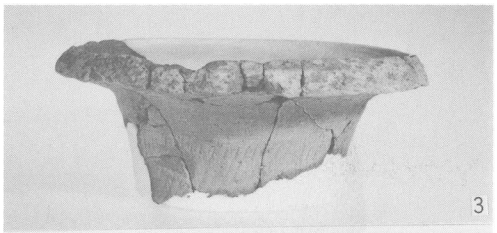


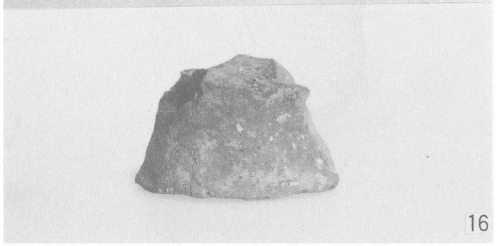


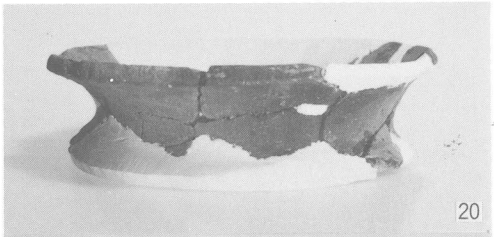


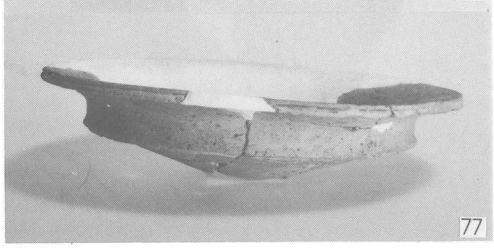


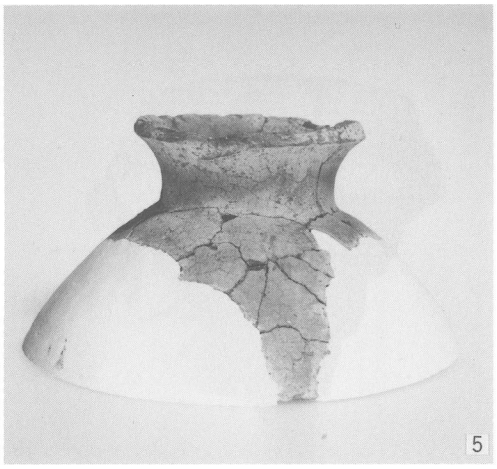
SK20 (79・81)　SK 8 (55)　SK12 (62)


3

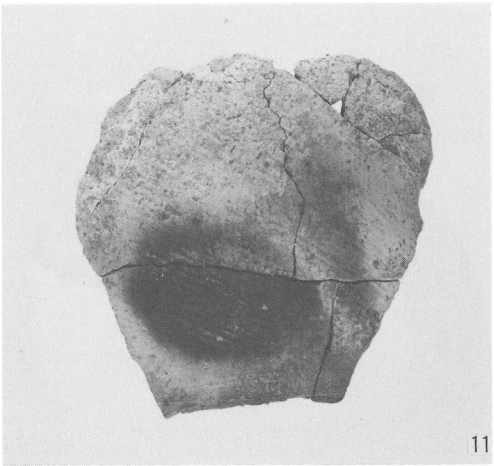

16

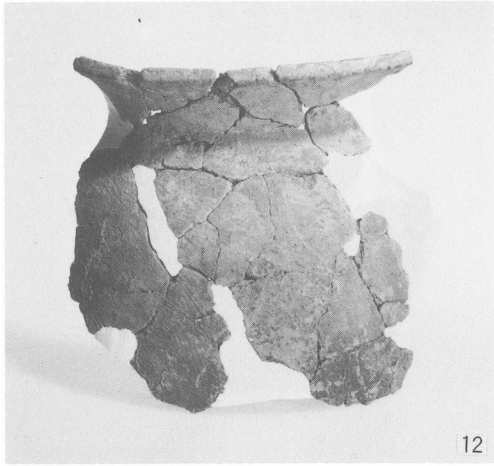

20


77


5


9


11


12

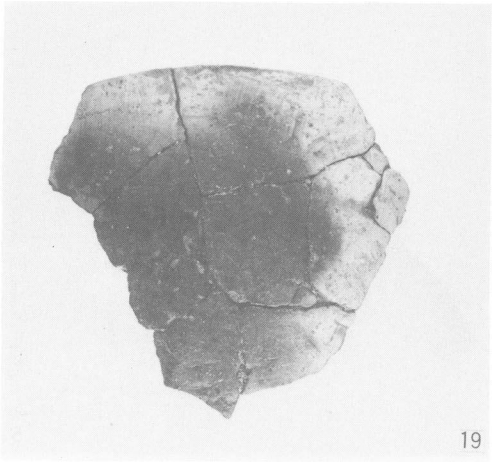
ST1 (3・5・9・11・12・16)　SK16(77)　SK3 (20)

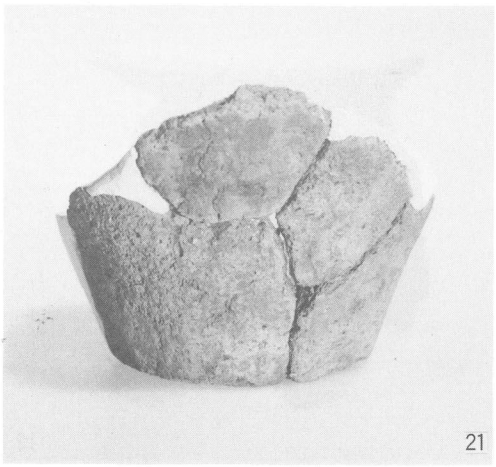
PL 22

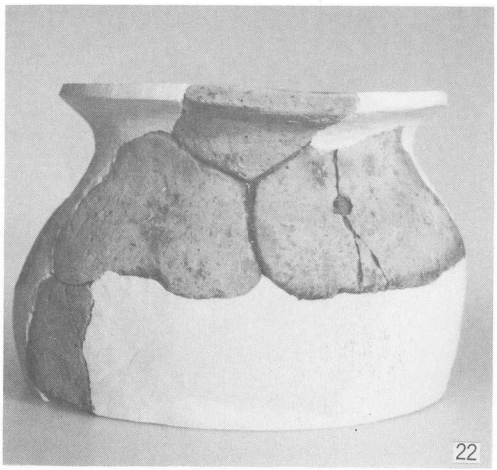




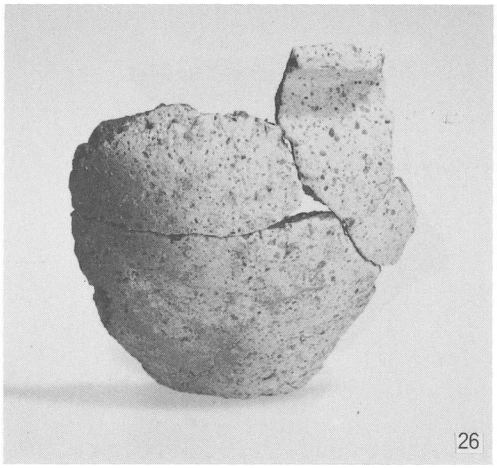


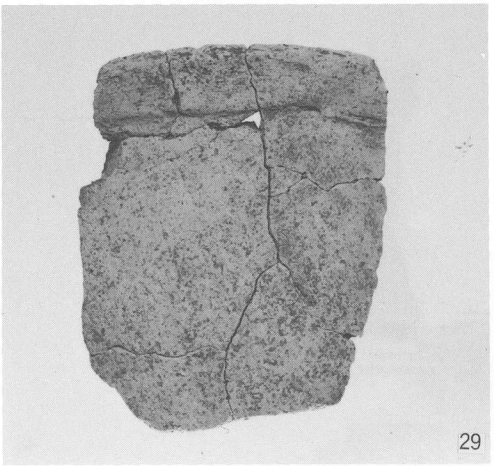






ST 1 (14・17・18・19)　SK 3 (21・22)

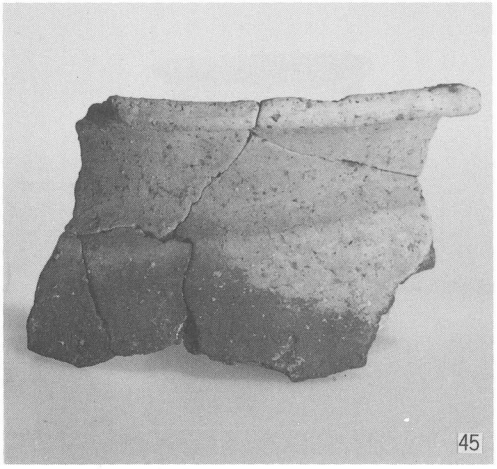






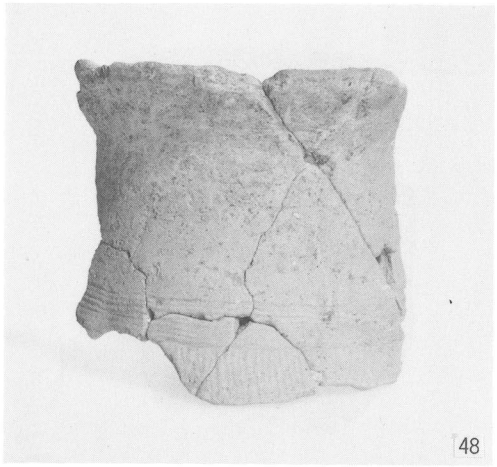






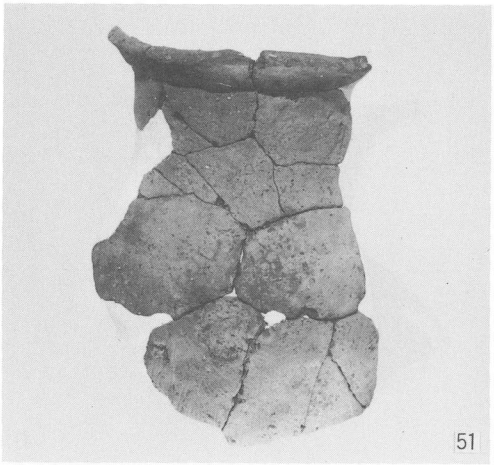
SK 7 (26) SK 6 (29) SK 8 (41 • 42 • 43 • 45)

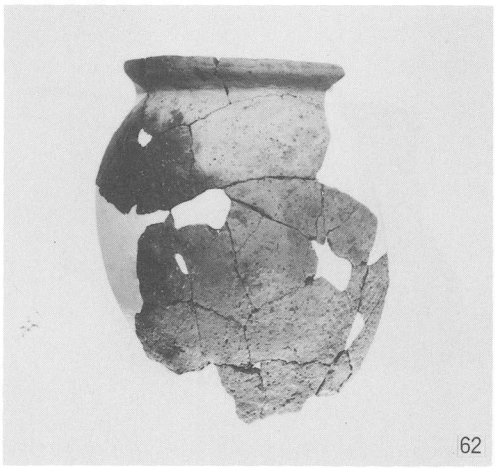
PL 24

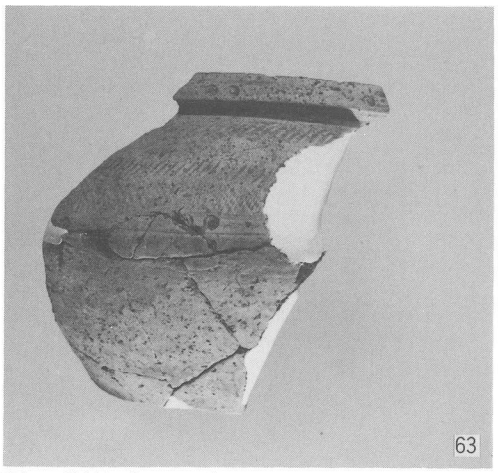

48


49


50

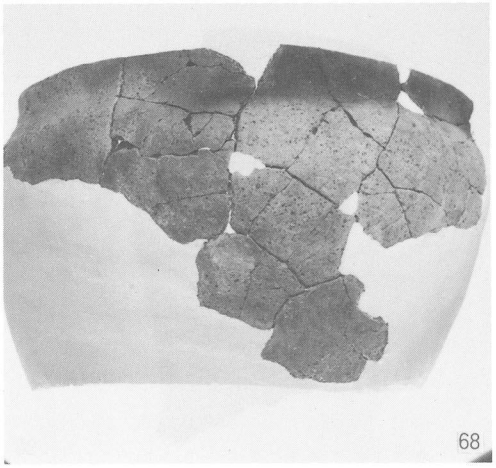

51

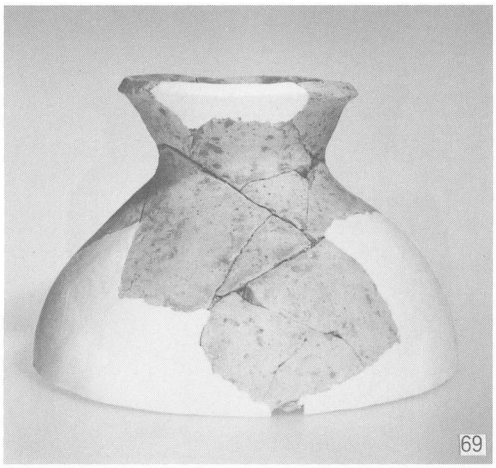

62

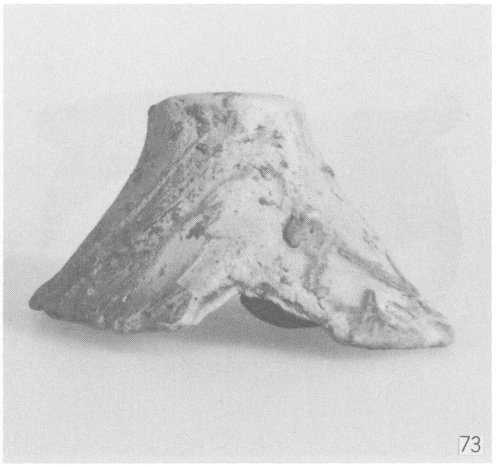

63

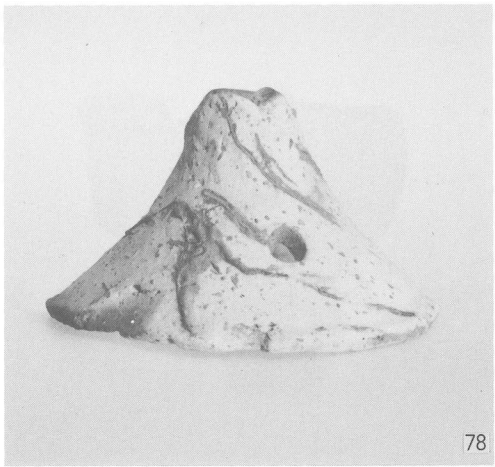
SK 8 (48・49・50・51)　SK12 (62・63)

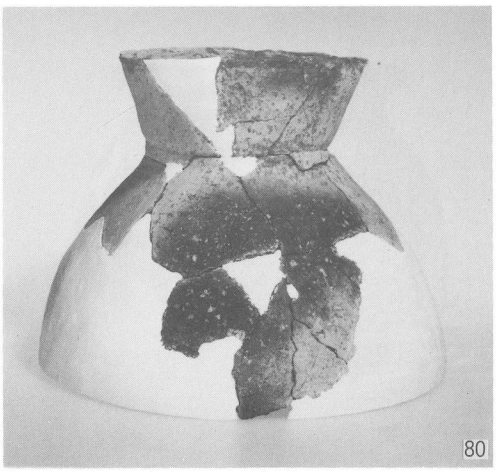












S K10 (64)　S K12 (68・69)　S K16 (73・78)　S K20 (80)

PL26

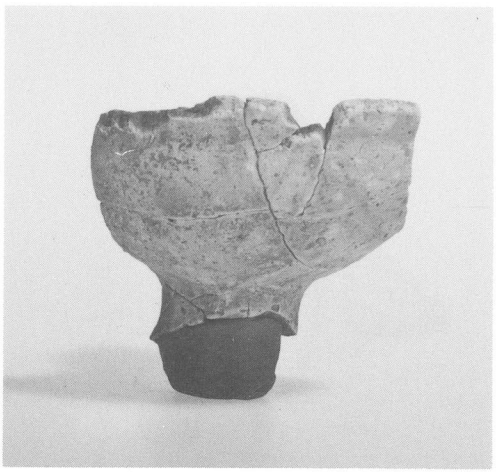




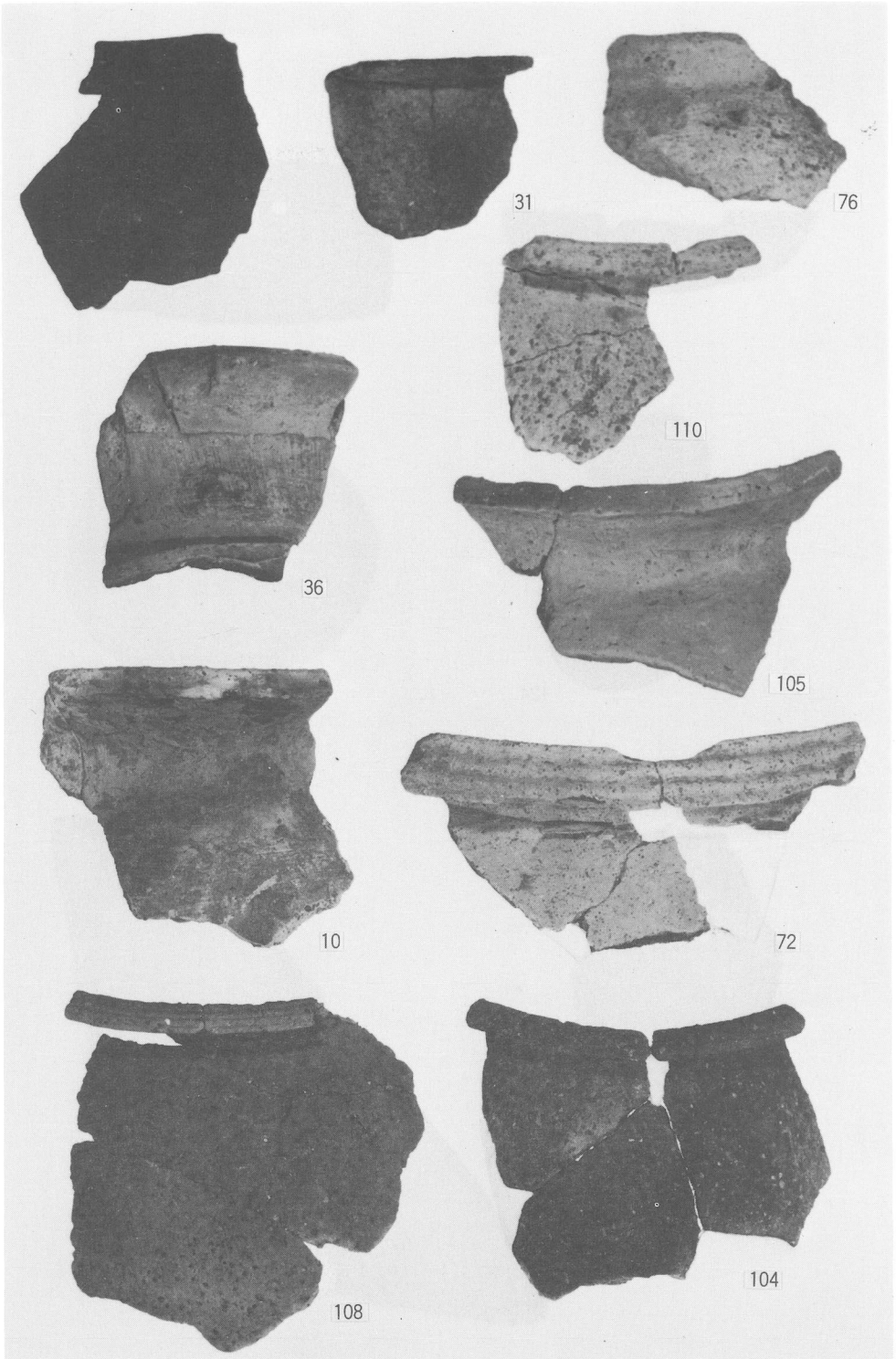






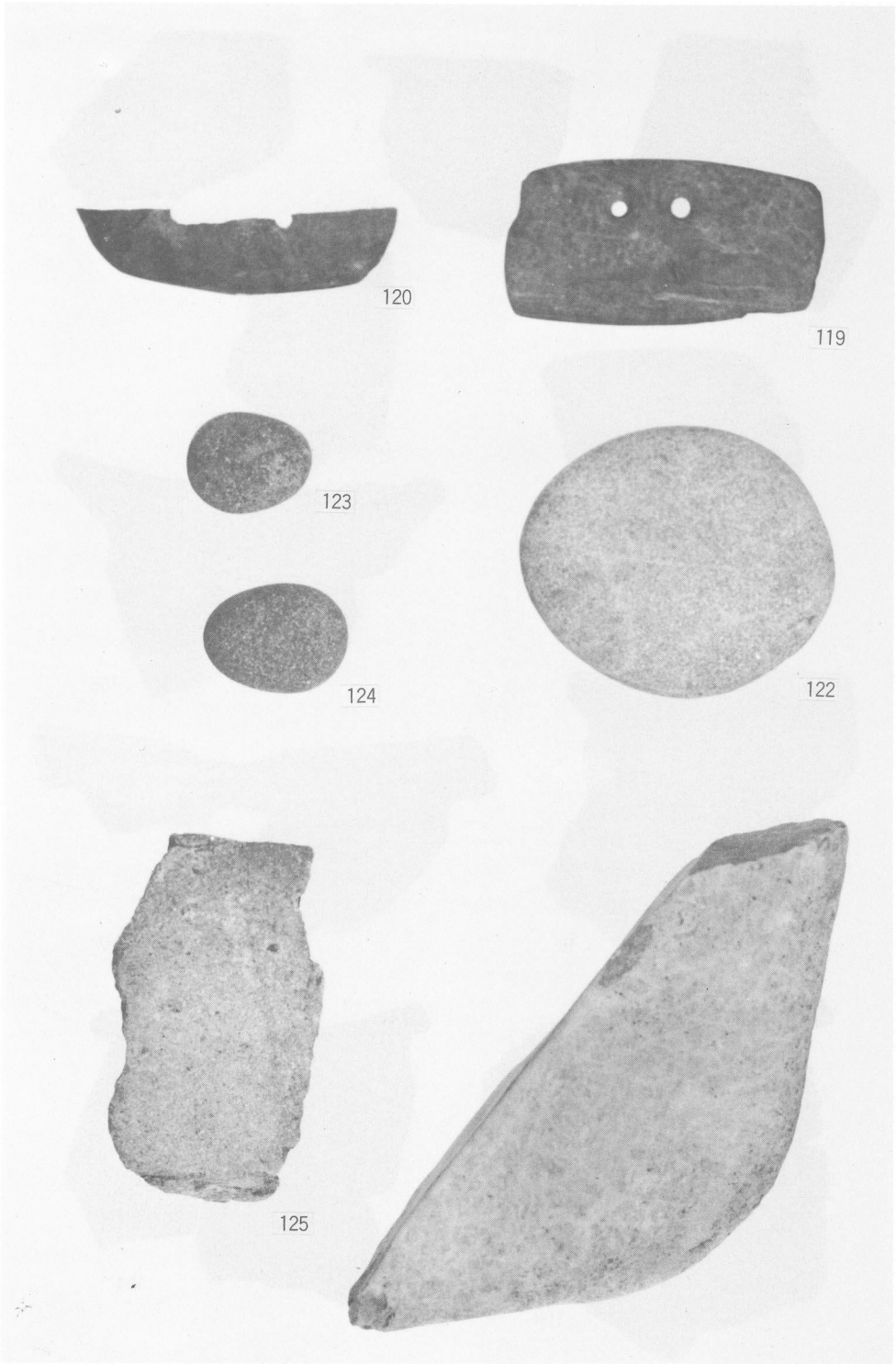


SD1 (90・93・94・96・112)



SD1 (104・105・110・108) ST1 (10) SK6 (31) SK7 (36) SK14 (72) SK16 (76)

PL28



ST1出土の石器

高知空港周辺整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

第　3　集

――南国市田村・前浜地区の調査――

1987．3

高知県南国市教育委員会